富山市の遺跡物語

打出遺跡の焼失住居

写真は、弥生時代終末期（約 1,800 年前）の焼失住居です。(p. 7 参照)
8.4m×7.6mの隅丸方形の平面形をもつ竪穴住居です。上部はすでに削平されていましたが、深さ 60cm が残っていました。

一般的に、長い年月と共に住居の建築材などは腐ってしまいますが、焼失住居は材が炭化することで、わたしたちに多くの情報を示してくれます。
この住居は材を組んで茅を葺いた後に、煙出し付近まで土を乗せていたことがわかりました。外見は土饅頭のような住居で、このような土屋根住居は近年、確認されることが多くなってきました。土を葺いているので、失火で燃え尽きることは考えにくく、この住居は意図的に燃やされたと考えられます。

意図的に燃やされる原因として、①使われなくなった住居を壊すために燃やした。②住んでいた人が病気や不慮の事故などで住居を使い続けるのを忌み嫌った、③戦いによって火をかけられた、などの説があります。

弥生人の精神生活にも大きく関係しているのかもしれません。(小黒智久)

北代縄文広場この1年　－2004年度－

北代縄文広場オープン5周年記念イベント・講演会開催　2004.4.29

「北代縄文広場オープン5周年記念イベント」と「記念講演会」を長岡校下自治振興会と富山市教育委員会で共催いたしました。

晴天の下、地元や県内外の方々、約500人が参加されました。

記念イベントでは、記念植樹やこいのぼりあげが行われ、北代獅子舞や呉羽山音頭が披露されました。また富山県警察による交通安全教室、音楽隊の演奏もありました。お昼には、縄文なべが振舞われました。

午後には、土田孝雄氏(糸魚川市文化財保護審議委員)による「縄文人とヒスイ文化」についての記念講演会が行われました。あわせて、県内の縄文遺跡から出土した翡翠製品も展示されました。

JICA(JAPAN INTERNATIONAL COOPERATION AGENCY)研修生 来跡　2004.5.25

文化財修復整備技術コースの研修生として来日していた9名の方が富山大学の酒井英男教授の案内で訪れました。研修生の国籍はアルメニア・ベナン・エルサルバドル・エチオピア・フィジー・マーシャル・タイと多彩で、自国では博物館や教育機関で考古学や民族学の研究をされています。

研修生は、復元された竪穴住居の深さや住居の形に興味を示していました。

ダーラム市中学生親善交流訪問団 勾玉づくり体験　2004.6.16

富山市と姉妹友好都市であるダーラム市(アメリカ合衆国・ノースカロライナ州)の中学生16人と指導員3人が訪れました。中学生たちは解説ボランティアの指導のもと「勾玉づくり」に挑戦しました。

サンドペーパーで石を削る作業では、うまく削れない子や削りすぎて勾玉が小さくなってしまう子などさまざまでした。

みんな、出来上がった勾玉を首から下げ、北代縄文広場の一日を楽しんでいました。

奥田中学校 14歳の挑戦 竪穴住居の修繕を体験　2004.7.7

平成16年7月7日(水)、埋蔵文化財センターで受け入れていた奥田中生徒2名(池上明人くん、布村綾音さん)の協力を得ながら、竪穴住居の屋根を修理しました。

屋根の土を一部取り除き、屋根材を取替え、その上に樹皮と防水シートを敷いてから土を被せました。

縄文人が家をつくる時の苦労を体験した「14歳の挑戦」でもありました。

夏休み特別企画「大きな縄文土器づくり」開催　2004.8.7

埋蔵文化財センター近藤学芸員の指導のもと、夏休みの特別企画として「大きな縄文土器づくり」を実施しました。

親子など８名の方が参加し、史跡北代遺跡から出土した有孔鍔付土器や新潟の火炎形土器などをモデルにしながら、各自で独特の土器作りに取り組んでいました。

中国・四川省の考古学者 視察　2004.10.14

富山県民会館で開催された「よみがえる四川文明～三星堆と金沙遺跡の秘宝展～」の随行員として来日されていた蔡清氏(茂县羌族博物館館長)と李大躍氏(四川省博物館陳列部副主任)が埋蔵文化財センター所長の案内で視察されました。

「中国の新石器時代は環濠が巡っていますが、北代遺跡では環濠は巡っていますか」などと質問され、日中考古学の比較をされていました。

タレント 石塚英彦さんが来源　2004.11.19

「メレンゲの気持ち特別版」の取材が行われました。

タレントの石ちゃんこと石塚英彦さんが縄文服？で来跡し、竪穴住居の中で火おこしを体験したり、石組炉でソーセージを焼いて食べていました。

石ちゃんは「この広場の下に土器がたくさん埋まっている」と聞いて、「ドキドキする」とダジャレを混じえて感激していました。

12 月 2 日（木)に全国放送され、北代縄文広場の様子が全国に紹介されました。

北代冬まつり開催　2005.1.29

長岡校下ふるさとづくり推進協議会の主催で開催されました。左義長・餅つき・ビンゴゲームなど地区住民約 320 人が参加して行われました。

今年は積雪が少なく、恒例の雪だまによる的当てゲームは中止されました。

当日は雲ひとつない冬晴れで、子供たちの声が縄文広場に大きくこだましていました。

発掘速報

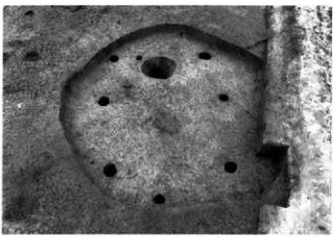
古代の製鉄遺跡の姿が明らかに

池多南遺跡

池多南遺跡は、富山市南西部の射水丘陵東端部に位置する縄文時代中期（約 4,500～5,000 年前）と古代（奈良～平安時代・約 1,200 年前）の生産跡です。

● 縄文時代の住まい

縄文時代中期の集落は丘陵尾根筋の平坦部に作られています。調査では 3 棟の竪穴住居跡を確認しました。住居は中期前葉～中葉のもので、円形の住居の床には柱を立てていた穴があります。柱の穴を結んだ内側の床は、現代の土間のように粘土を敷き、硬く踏み固めた「貼床」としています。住居中央には浅く掘りくぼめただけの簡単な炉（地床炉）が設けられています。



縄文時代中期の竪穴住居跡

周辺の丘陵には同じ縄文時代中期前葉～中葉に営まれた開ケ丘中山Ⅲ遺跡と開ケ丘狐谷Ⅲ遺跡の中核的な遺跡が所在します。当時の人々が山の幸を求め、丘陵の各地に集落を営んだことがわかります。

● 古代の鉄生産

古代には丘陵の斜面と平坦面を利用して鉄生産が行われました。鉄生産を行うには炉の燃料として大量に炭が必要で、1 基の製鉄炉を操業するために 3～4 基の炭焼窯で生産される木炭の量が必要とされています。

今回の調査では奈良時代後半～平安時代（8 世紀末）の製鉄炉 2 基と炭焼窯 3 基を確認しました。製鉄炉は丘陵の平坦面に作られており、地下部に防湿施設の木炭層をもつ「長方形箱形炉」です。炭焼窯は丘陵東斜面の急な傾斜を利用して作られています。平成 14 年に実施した試掘確認調査では 1 基の製鉄炉の周りに 2～3 基の炭焼窯が配置される状況を確認しています。

奈良～平安時代の製鉄炉

奈良～平安時代にかけては北陸の各地域で製鉄の大規模集中操業がみられ、特に広い丘陵を単位として製鉄遺跡群が形成されます。射水丘陵では池多南遺跡が所在する山本地区から三熊地区・開ケ丘地区と小杉町の太閤山ランド周辺などで製鉄遺跡が多く見られ、古代手工業生産の中心となっていました。

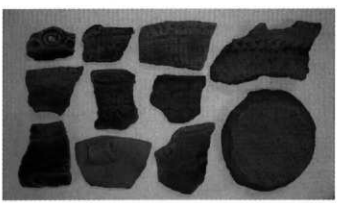
（近藤顕子）

縄文人の低地への進出　　水橋荒町・辻ヶ堂遺跡

水橋荒町・辻ヶ堂遺跡は、常願寺川右岸河口近くの海岸部に立地しています。調査地点から海岸線までの距離は200mほどで、砂地を掘り込んで遺構が形成されていました。

縄文時代後期初頭（約4,000年前）の溝や弥生時代中期（約2,000年前）の溝・土坑、中世（約700年前）の石組井戸が見つかりました。出土遺物には縄文時代の土器・石器や弥生時代の土器、中世の珠洲焼・土師器があります。なかでも目を引くのが、大量に出土した縄文土器と弥生土器です。約50㎡という狭い調査範囲の中から、コンテナ15箱分もの土器が出土しました。

縄文土器は後期初頭に主に石川県と富山県に分布する気屋式土器が主体です（写真）。気屋式土器は、口縁部や頸部に施された三角形の刺突文やヘラで描いた幾何学的な文様が特徴です。県内で気屋式土器が出土する遺跡は、丘陵や台地上など標高の高い場所に比較的多く営まれます。本遺跡のように海岸部に近い低地でこれほど多く出土する遺跡はあまり知られていません。



低地に人が住み始めるようになるのは主に晩期に入ってからで、近くでは誕生寺野田・早稲遺跡や岩瀬天神遺跡などが知られています。今回の調査地で後期初頭の気屋式土器が数多く出土したことは、この地の縄文人がいち早く低地への進出を果たしたことを物語っています。　　（野垣好史）

柱穴間に溝をもつ掘立柱建物　　水橋二杉遺跡

水橋二杉遺跡は常願寺川下流の右岸に立地する、奈良~平安時代（約1,200年前）の集落跡です。これまでの調査では、土器に墨やヘラで文字を書いた墨書土器や刻書土器が出土し、官衙的な性格をもつ遺跡と考えられています。

本年度の調査でも同時期の掘立柱建物や溝、土坑などが見つかりました。掘立柱建物は、3間×2間の側柱の構造（6.5m×5.2m）で、柱穴は一辺約60～70㎝の方形です。柱穴の底には直径約15cmの柱の根元部分が腐らずに残っていました。この掘立柱建物には、桁側の一辺と梁側の二辺の柱穴間に浅い溝がコの字状にめぐる特徴がみられます。壁や仕切りのために板材をたてていた跡かもしれません。過去に行った隣接地の調査では、2棟の掘立柱建物が見つかっていますが、いずれも総柱の構造で規模が小さく、倉庫跡と考えられています。今回見つかった掘立柱建物はこれらとは異なる性格をもつ建物跡と考えられます。

（野垣好史）

弥生時代の焼失住居跡見つかる！

打出遺跡

打出遺跡は、神通川旧流路の左岸河口付近に広がる縄文時代晩期から近世にかけての複合遺跡です。自然堤防上の高まりには弥生時代終わり頃から古墳時代初め頃と、鎌倉時代から室町時代にかけての集落が営まれていました。

石帯（丸鞆）

● 河川跡

海側に近い部分で旧神通古川の流路と考えられる河川跡を発掘しました。15年度調査で三連壺が見つかっています。河川跡の西岸から川の中央部にかけて、弥生時代後期から江戸時代に至るまでの遺物が見つかっています。特に注目される遺物として古代の役人の帯飾りである石帯（丸鞆）、近世のキセルや船玉などがあります。

● 弥生～古墳時代の集落跡（約 1,800～1,700 年前）

弥生時代終末期から古墳時代前期の集落の遺構として竪穴住居・掘立柱建物・周溝状遺構・溝・土坑を検出しました。竪穴住居は5棟検出し、うち4棟は弥生時代終末期、残る1棟は古墳時代前期のものです。

打出遺跡と対岸に位置する江代制遺跡は、竪穴住居の規模や構造、土器の胎土、遺跡が営まれなくなった状況や存続期間が似ており、両遺跡は密接な関係を持って営まれていたと考えられます。弥生時代終末期には、旧河川の水量が安定し自然災害を被りにくい状態ができたことで、川岸にムラをつくるには適した状態になりました。そして、弥生時代終末期にムラは最も栄えますが、やがて古墳時代前期以降、生活の痕跡が少なくなります。河川の水量が多くなったことで氾濫が起きやすくなり、生活の場を他の地域へ移すことを余儀なくされたのでしょう。

● 奈良～平安時代の道路跡（約 1,300～1,200 年前）

北西－南東方向に直線的に走る2条の溝跡が確認されました。これは道路の側溝跡と考えられます。側溝は幅 0.35～0.8m、深さ 0.1～0.35m で3回以上掘り直されています。道路面はすでに削られていますが、道路幅は溝の中心間で 5.5～6.5m となります。

2条に並ぶ道路側溝跡

現在までの研究では、①直線道路、②道幅を側溝や盛土などによって明確に示す、③道路幅が3m（一丈）の倍数である道路については官道であるといわれています。この道路がどことどこを結ぶ道路であったのか、今後周辺遺跡との関連の中で考えていく必要があります。

また、側溝を持つ道路跡の他に波板状凹凸と呼ばれる土坑列が見つかっています。これは古代から中世の道路面によく見られる遺構です。路面のぬかるみを防ぐために掘られたといった説や荷物運搬のためのコロを敷いた跡という説などがあります。

● 鎌倉～室町時代の大溝（約 800～700 年前）

大溝は幅 2～3m、深さ 0.6～0.9m で断面形はV字状または逆台形状です。平成 15 年

度調査区でもこの溝の連続と考えられる溝が見つかっており、中世の集落を区画する大溝であったと考えられます。海岸部には四方荒屋遺跡など多くの中世の集落遺跡が存在します。

● **弥生時代の焼失住居**

弥生時代終末期の住居1棟からは、炭化した建築部材や焼けた土の塊が多くみられました。このような弥生時代の焼失住居としては県内7例目となります。

一般に竪穴住居の屋根部分については、腐ってしまうため、形やその上に葺いていた材料などは、限られた発掘資料から推測するしかありません。これに対して、焼失住居は、燃え残った建築部材から当時の状況を細部まで推定することができるのです。打出遺跡の焼失住居は残り具合が良く、ほぼ全容を確認でき、竪穴住居の構造を復元するうえで貴重な資料となりました。建物の規模は他の竪穴住居が一辺5～6mの方形なのに対し、焼失住居は隅丸方形で8.4m×7.6mと大型です。主柱の数は4本で、柱自体は残っていませんでしたが、柱穴の様子から直径約20cmと推定することができます。建物の中央には浅く掘り窪められた炉があり、燃料として使用されたと思われる炭化材が炉の床全面を埋め尽くしていました。

住居内からの高杯出土状況

焼土や炭化材を観察すると、住居の構造や作られた工程が復元できます。まず①主柱に梁・桁をかけ、②斜めに垂木を渡し、③その垂木に直交して小舞を渡します。さらに、④小舞と同じ方向に茅を葺き、⑤その上に垂木と同じ方向の茅を葺いた上で土を葺いていました。

炭化材の上に焼けた土が乗った状態のものが多いことから茅の上には土が乗っており、屋根を土で覆った土屋根住居であると判断されます。土屋根の竪穴住居は縄文時代の富山市北代遺跡・開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡でみられるほか、寒冷地の国外の民族例にもみることができます。

住居の梁と桁材の残存状況

また、中央部には炭化材が存在しない部分がありました。真上には煙出しがあり、通気孔となって激しく燃焼したことから材が燃え尽きたのではないかと考えられます。焼土の分布状況から、煙出し付近まで土を葺いていたようです。さらに、この住居の特徴として垂木同士の間隔が狭く、材が厚くて幅広であることがあげられます。焼失住居の検出例の中でもきれいな放射を描いた状態で出土しました。屋根に土が葺かれていたことで酸素が運ばれにくく不完全燃焼し、建築部材が完全に燃え尽きることなく一気に崩落したと考えられます。建物を焼き払った後、使用しなくなった土器をまとめて捨てていました。火災を受けた時点では、排水用の壁溝が埋まっていたことなど生活の痕跡があまりみられないことからこの火災は建物の廃棄に伴う焼却と推測されます。

（安達志津・鍋谷仁美）

古代の人々は井戸に何を願ったか？

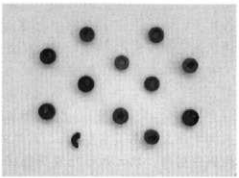
八町Ⅱ遺跡

八町Ⅱ遺跡は、呉羽山丘陵の北西側に広がる射水平野に立地する古墳時代中期（約1,500年前）と鎌倉時代（約700年前）の集落跡です。

本年度の発掘調査では、古墳時代中期の井戸6基・中世の土坑1基と区画溝、畠跡を確認しました。

● 古墳時代の井戸祭祀か

調査区南東部から地面を掘り窪めただけの素掘りの井戸が2基並んで見つかり、その内の1基の井戸底から、古墳時代中期（5世紀中頃）のほぼ完形の甕が3点出土しました。1点は別の甕の口縁の破片を逆さに据え台として利用し、甕内部に溜まった土が水平に堆積していたことからその台の上に据えられた状態だったことがわかりました。残り2点も、意図的に口縁を上向きに据えられていたようです。このような井戸に完形の土器を埋める例は、九州や関西など西日本一帯に多く見られます。



古墳時代の臼玉（直径3㎜）

甕の内部を観察した結果、これらの甕3点全ての底部には植物繊維の束が付着していました。この繊維は科学分析の結果、イネ科の植物ということがわかりました。

また、並んで見つかった2基と南側に約10m離れた1基の3基の井戸の覆土中から臼玉が合わせて12点見つかりました。臼玉はいずれも直径約3mmの滑石製で5世紀前半～中頃のものと見られます。同様の臼玉は県内では岩瀬天神遺跡（富山市）や浜山玉作遺跡（朝日町）などで見つかっていますが、今回のように遺構から出土した例は少なく、非常に貴重です。

これらのことから、本遺跡では井戸の廃絶に伴い、植物を入れた甕を井戸の底に納め、臼玉を蒔き入れながら井戸を埋める祭祀が行われていたと考えられます。具体的な井戸祭祀の形態が明らかになり、井戸祭祀の研究にとって貴重な類例となりました。

● 中世の集落

調査区は中世集落の西端部にあたり、ここには畠と見られる耕地が広がっていたと考えられます。畠の畝跡が南北方向に一定の間隔で並び、計画的に耕作が行われていたようです。

調査区南東部では幅1.2mの区画溝が確認されました。溝の東側は、屋敷地となっていると考えられます。溝は十字に交差し、屋敷地を方形に区画しているものと見られます。

集落の中心は更に東側に広がると考えられ、今後の調査が期待されます。

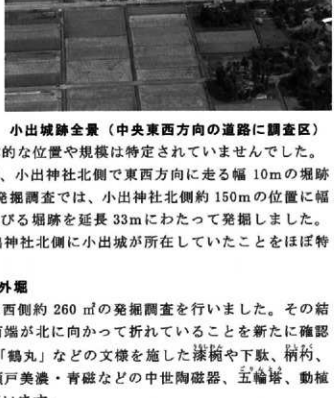
（山崎美和）

古墳時代の井戸と甕の出土状況

水橋に眠る広大な平城(ひらじろ)

● 小出城の概要

小出城跡は富山市の東北部、水橋小出地内の小出神社周辺にあったと伝えられています。天正９（1581）年３月「小出の戦い」で織田信長方の佐々成政と越後上杉景勝方が戦火を交えた際、織田方前線基地として越中戦国史に登場します。織田・上杉勢力の境界線上に位置していた城です。『越中古城記』には「南北二十二間、東西三十間の平城」と記されています。しかし、詳細な絵図面などが残っていないうえに現在一帯が水田化されているため、具体的な位置や規模は特定されていませんでした。



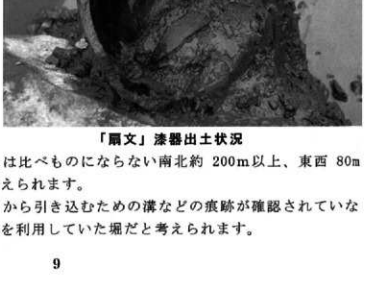
小出城跡全景（中央東西方向の道路に調査区）

平成 10～13 年度の試掘確認調査では、小出神社北側で東西方向に走る幅 10m の堀跡を確認しました。また、平成 15 年度の発掘調査では、小出神社北側約 150m の位置に幅 6m 以上(推定幅約 10m)の東西方向に伸びる堀跡を延長 33m にわたって発掘しました。これらの成果や旧地割り図などから小出神社北側に小出城が所在していたことをほぼ特定することができました。

● 北に伸びる内堀と新たに発掘された外堀

県道拡幅工事に伴い、昨年度調査区の西側約 260 ㎡の発掘調査を行いました。その結果、昨年度検出した東西方向の堀跡の西端が北に向かって折れていることを新たに確認しました。堀内からは「扇」や「俵」、「鶴丸」などの文様を施した漆椀(しっぱん)や下駄、桶(おけ)、曲物、灯明(とうみょう)皿、中世土師器、珠洲焼、瀬戸美濃・青磁などの中世陶磁器、五輪塔(ごりんとう)、動植物遺体（種・骨）、鉛玉(なまりだま)などが出土しています。

また、この堀の西側約 36m 離れたところで南北方向に伸びる幅約 7m の大溝を検出しました。周囲の遺構（井戸など）の状況から上部が大きく削平されており、本来は幅 10m 前後の堀としての機能を備えていたと推測されます。この堀内からは漆椀、灯明皿、中世土師器、中世陶磁器、櫛(くし)、木簡(もっかん)、鉛玉などが出土しています。



「扇文」漆器出土状況

昨年度発掘したＬ字に折れる堀と今回検出した堀は、外堀と内堀の関係にあったと推測されます。

従って、文献に残っていた記録とは比べものにならない南北約 200m 以上、東西 80m 以上の大規模な平城だったことが考えられます。

また外堀、内堀ともに、水を周りから引き込むための溝などの痕跡が確認されていないことから、堀底から沸いてくる水を利用していた堀だと考えられます。

堀の中からは昨年度と合わせて約60点もの漆器が出土しました。狭い範囲から集中して多数の漆器が出土するのは極めて珍しいことです。漆職人を城館に招いて漆器を製作していた可能性が高くなりました。漆椀には火を受けたものや意図的に穴の開けられているものが出土しており、祭祀などに使用する道具として転用された可能性があります。

新たに検出された外堀（西側から）

堀の斜面からは人頭大の石が多く出土しました。石は不規則に並び、地山からやや浮いた覆土中から出土していることから護岸のために配置されたのではなく、投棄された可能性が高いと考えられます。石には被熱したものもあり、戦火との関連性も含め、投げ込まれた意味や時期などについて、今後検討していきたいと考えています。

● **生活跡を物語る遺構**

今年度の調査では８基の井戸を検出しました。その内１基は井戸側（枠）に桶を用いてあり、水溜めとして井戸底に曲物を掘めていました。井戸からは珠洲焼や土師器、櫛、箸、曲物の底板、井戸使用後に投げ込まれたと思われる石などが出土しました。

また、井戸や外堀を切り込んで東西方向に伸びる延長約 16m、幅 0.3m、深さ 0.2m の細長い溝を検出しました。出土遺物から 17 世紀頃（江戸時代前半期）の屋敷地を区画する溝と思われます。

小出城が前線基地として戦乱の世を潜り抜け、城館としての役割を終えた後も、この地に人々が定住し、暮らしを営んでいたことが各地から運ばれた江戸時代以降の陶磁器（唐津・伊万里・越中瀬戸など）が多数出土することからうかがえます。

● **歴史上に残る災害との関係**

内堀西側の地山の断面を観察したところ、地層に歪みが生じている箇所を確認しました。これは地震の断層活動の痕跡を示しています。平成 15 年度調査でも、調査区内の地山一部が黄色砂に変わっている箇所が確認され、地震の液状化現象による噴砂の跡と考えられます。

今後、科学的な測定などにより、地震の発生を裏付ける痕跡の検討を行って地震発生時期や規模について明らかにしていく予定です。

地震による地層のずれ・歪み

● **小出城の解明**

今回の調査では、小出城の正確な規模を把握するための多くの情報が得られ、加えて当時の災害状況を知り得る貴重な痕跡を確認することができました。今後、周辺の発掘調査や地中レーダーなどを用いた理化学調査によって、小出城本来の姿がうかびあがってくるでしょう。

（稲垣裕二）

白岩川右岸の中世前期の領主館

水橋金広・中馬場遺跡

水橋金広・中馬場遺跡は、白岩川中流右岸の南北 500m の範囲に位置する大規模な集落・館跡です。

遺跡の北部には戦国～江戸時代前期の館があり、今回調査を行った遺跡の南部には鎌倉～室町時代（約 800～600 年前）の掘立柱建物や竪穴状遺構、井戸、溝、土坑等が検出されました。

柱穴を伴う掘立柱建物

● 大型の掘立柱建物

建物は３棟以上あり、うち１棟は４間×４間以上の大型建物です。

建物の柱穴には柱根や低地のため柱を支え、沈みを防ぐ木の板や石（礎盤）が良好に残るものもありました。この建物は調査区の中でも限られた場所に集中していました。また、３棟が重複して検出されたことから、この場所で少なくとも２回の建て替えが行われていたと考えられます。さらに重複した２棟は同じ軸を向けて建てられていますが、もう１棟は角度を約 45 度ずらして建てられていました。

建物に近接して深い掘り込みのある竪穴状遺構があります。この掘り込みからは常時水が湧き出しており、遺構内に水を貯えることができます。この遺構へ流れ込む溝も検出されていることから、水溜として利用されていたと思われます。上部から大量の木片が出土し、その最下部からは長軸 82cm、短軸 29cm、厚さ３cmの隅丸方形の板状木製品が出土しました。両端は中央部に向かって斜めに、中央部は平滑に削られ、使用痕が確認できます。「槽（ふね）」あるいは「平おけ」と呼ばれるもので、何かを捏ねるための板と考えられます。

「槽」の出土状況

● 領主クラスの館の付属施設か

また、規則正しく配列された柱穴を伴う竪穴状遺構が１基確認されました。長軸 5.6m、短軸 4.0m、深さ 0.3m前後の隅丸方形で、柱間は３間×４間です。柱根は残りませんでしたが、礎盤が残っていました。柱穴を伴うことから、覆屋を伴う建物と推定されます。竪穴状遺構からは陶磁器類はほとんど出土しませんでした。

遺跡北部～中央部では漆器や陶磁器類、木製品等が数多く出土していました。しかし遺跡南端部の調査では漆器はほとんど出土しませんでした。井戸も素掘りに限られ、密度も極端に少なくなりました。南端には屋敷地を区画する東西方向の大溝が見つかっています。このため建物跡は倉庫や馬小屋のような施設が領主クラスの館の南端に離れて建てられていたのではないかと推定されます。今後、科学的な年代測定や土壌分析を行い、掘立柱建物の建替えの時期差や建物の性格を検討していきます。　（鍋谷仁美）

本丸・西の丸で戦国期神保氏の城を確認

富山城跡

城址公園整備計画に伴い、平成16年7～8月に行なった試掘確認調査で、戦国時代の中世富山城と、近世富山城の堀などの遺構が確認されました。

●中世富山城の規模　これまでの調査で、中世富山城の遺構は城址公園の西半分に存在することを確認していましたが、今年度の調査で、東側半分にも堀などの遺構の広がりを確認しました。これによって、中世富山城の範囲は、少なくとも城址公園のほぼ全域、東西260m、南北120m以上（31,000㎡以上）に及ぶ大きなものであったことがわかりました。

●中世富山城の構造　本丸北東部では地下2mで東西に延びる堀の一部を確認しました。この堀は、本丸中央北側で昨年度確認した薬研堀と連続する可能性があります。

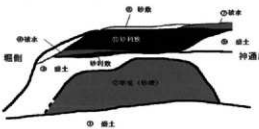
本丸中央東側では凹凸のある基盤層が確認されました。この凹凸は基盤土上部の土を鍬などを使用して掘削した跡で、ここで掘削された土は良好な整地土として城内のどこかへ運ばれたものとみられます。

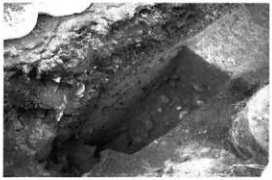
●江戸時代の堀の構造　本丸北側の松川べりでは、幅21.5m（12間）の堀跡と、堀と松川（旧神通川）を隔てる築堤の一部を確認しました。築堤の存在は江戸時代の各絵図にも表現されています。築堤は全体が盛土で造られ、3期の変遷が認められました。第1期は、砂礫土で造られた築堤で、その盛土中には戦国時代のかわらけが含まれていました。第2期はこれを補強して50cmの厚さの盛土が行なわれました。この盛土の上には幅90cm（3尺）の砂利道が設けられました。その後この築堤は洪水で埋没したため、上に盛土をして第3期の築堤が造られました。この上には幅2.7m（2間半）の砂利道が設けられました。その後、この築堤も洪水で泥水をかぶっていたようです。それぞれの詳しい年代は不明ですが、神通川の洪水のたびに築堤や堀が修繕されていた事実がよくわかります。

（古川知明）

本丸東部の土取跡

築堤の構造模式図





本丸北側堀の築堤断面

よみがえる近世富山城下町

近世富山城は、慶長10（1605）年に前田利長によって再建されますが、慶長14（1609）年の大火で灰燼に帰します。寛永16（1639）年に富山藩が成立し、初代藩主前田利次によって寛文元（1661）年以降に修築されました。

平成16年4月に西町・総曲輪地区市街地再開発事業に伴い、初めて近世富山城下町の発掘調査を行いました。調査地は富山城の南東の外堀の外側で、『越中国富山古城之図』正保4（1647）年では町屋敷、『万治年間富山旧市街図』（1658～1661年）・『寛文六年十月御調理富山絵図』（1666年）では岩田宇兵衛屋敷、『富山城下絵図』天保2（1831）年・『越中富山御城下絵図』安政元（1854）年では御郡役所にあたります。

これまでは、戦災やその後の復興などで城下町はほとんど残っていないと考えられていました。しかし、発掘調査の結果、部分的に当時の遺構が残っていることがわかりました。

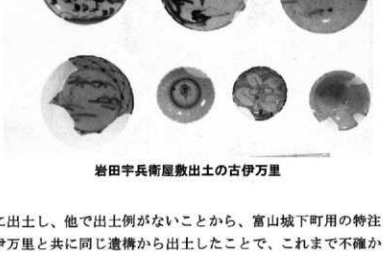
発掘調査地全景（総曲輪通り側から撮影）
水中ポンプのホースがある井戸は直径約2.5m

調査では1640～50年代の井戸や地割溝、1660～90年代の井戸や廃棄土坑が確認されました。

前者は『越中国富山古城之図』の年代に、後者は『万治年間富山旧市街図』・『寛文六年十月御調理富山絵図』の年代にほぼ合致することから、調査で見つかった遺構は、町屋敷と岩田宇兵衛屋敷の遺構であることがわかります。

● 各地の陶磁器が出土

町屋敷からは、絵唐津や備前、瀬戸、青花などの高級品も出土していることから、商家など富裕層の屋敷であった可能性があります。また、出土した土師器は金沢城のものに類似しており、その背景として当時は加賀藩から富山城下町を借用している時期であったことが関係しているのかもしれません。



岩田宇兵衛屋敷出土の古伊万里

岩田宇兵衛屋敷からは古伊万里が多数出土し、越中瀬戸の初期製品も多く出土しました。

一方、越中瀬戸の素焼皿が大量に出土し、他で出土例がないことから、富山城下町用の特注品と考えられます。越中瀬戸が古伊万里と共に同じ遺構から出土したことで、これまで不確かだった越中瀬戸の使用された年代を把握するためのよい情報が得られました。（小黒智久）

平成１６年度埋蔵文化財センター事業

1 埋蔵文化財調査

●発掘調査 開発に先立ち、遺跡を記録保存することなどを目的とした調査です。

遺跡名(市No.)	所在地	調査原因	面積(㎡)	調査結果	遺跡の種類
打出(No.009)	打出	一般県道四方新中茶屋線道路改良工事	3,507	竪穴住居・平地住居・土坑・濠・周溝状遺構(弥生終)、礎立柱建物(弥生終～古墳前)、竪穴住居(古墳前)、道路・濠・土坑(奈良～平安)、溝・土壙墓(室町)、河川(弥生後～江戸)／弥生土器(弥生後)、弥生土器、鉄器・管玉・炭化種籾(弥生終)、古墳前土器・翡玉(古墳前)、須恵器・土師器・石帯(奈良～平安)、珠洲焼・土師器(室町)、青磁・瀬戸美濃・銭鐵(中世)、越中瀬戸・煙管・伊万里(江戸)、土師(弥生～江戸)、鉛玉・筆(不明)	集落
打出(No.009)	打出	個人住宅建設	55	濠(弥生後)、濠・土坑・ピット(中世)／弥生土器(弥生後)、中世土師器・珠洲焼・瀬戸美濃・鉄滓(中世)、陶器(不明)	集落
水橋荒町・辻ヶ堂(No.044)	水橋辻ヶ堂	病院施設等建設	1,650	礎立柱建物・濠・土坑(古代)／須恵器・土師器・木製品(古代)	集落
小出城跡(No.065)	水橋小出	一般県道下砂子坂池田町線鼎単独道路改良工事	260	堀・井戸・土坑(戦国)、濠(江戸)／土師器・須恵器(古代)、中世土師器・越前焼・瓦質南部・珠洲焼・瀬戸美濃・青磁・玉鬘塔(中世)、近世陶器・越中瀬戸(近世)、井戸枠・擂鉢焼・笠状木製品・下駄・曲物(中世～近世)、鉛玉・種子・骨片(戦国)、鉄滓(不明)	城館
願西寺城跡(No.066)	野々上	自動車整備士専門学校建設	1,600	濠・土坑・ピット(中世)／中世土師器・珠洲焼・漆椀・曲物・下駄・笠状木製品・鋼銭(中世)、越中瀬戸(江戸)	城館
百塚住吉D(No.183)	富尾	個人住宅建設	210	土坑・ピット(古代)／土師器・須恵器(古代)	集落散布地
水橋二杉(No.217)	水橋二杉	個人住宅建設	105	貯蔵穴(縄文)、礎立柱建物・濠・土坑・ピット(古代)、土坑・ピット(不明)／縄文土器、土師器・須恵器・柱(古代)	集落
富山城跡(No.397)	鍋山輪	西町・鍋山輪地区市街地再開発事業	130	濠(古代)、井戸・土坑・ピット(江戸)／弥生土器(弥生)、須恵器・土師器(古代)、珠洲焼・瀬戸美濃・青磁・織部・肥前(中世)、土師器・伊万里・唐津・越中瀬戸・青花・五鬘塔・キセル・鐘・釘・鎧・水引・布・漆膜・骨・瓦・赤色顔料・櫛(江戸)、鉄製品(不明)	城下町
池多南(No.415)	山本	県営畑地形総合整備事業	1,696	竪穴住居(縄文中)、土坑・ピット(縄文)、製鉄炉・炭焼窯(奈良)、土坑・穴(古代)、穴(不明)／縄文土器・石鏃・土偶・打製石斧・磨製石斧・磨石・石皿(縄文中)、剥片・原石(縄文)、土師器・須恵器・鉄滓(奈良)、泥面子・キセル(近世)	集落窯製鉄
水橋金広・中馬場(No.251)	水橋清水堂	県営農道整備事業上条南部地区	800	礎立柱建物、竪穴状遺構、大溝、濠、土坑、井戸(鎌倉～室町)／中世土師器・珠洲焼・青磁・白磁・擂鉢・木製品(鎌倉～室町)須恵器・土師器(平安)	集落
八町Ⅱ(No.109)	八町南	県営農道整備事業呉羽和合地区２期	1,011	井戸(古墳)、濠・大溝・土坑・島(中世)／磨製石斧・回石・磨石・剥片(縄文)、土師器・白玉(古墳)、須恵器(古代)、擂鉢・珠洲焼(中世)、越中瀬戸・瀬戸美濃・青磁・八尾・唐津・伊万里(近世)	集落
黒崎程田(No.480)	黒崎	駐車場造成工事	670	竪穴状遺構・礎立柱建物・区画溝・土坑・井戸(中世)／土師器(古墳)、珠洲焼・土師器・古瀬戸・青磁・白磁・越前・鉄製品・鉄滓・碁石(中世)、越中瀬戸・唐津(江戸)	集落
境野新南Ⅲ(No.600)	境野新	個人住宅建設	300	ピット(縄文)、溝・焼壁土坑・土坑・ピット(古代)／縄文土器・石匙・剥片(縄文)、土師器・須恵器(古代)	
計 13 件			11,994		

●試掘確認調査 開発予定地内の遺跡の有無などを確認する調査です。＊は工事立会で遺構・遺物を確認したもの (２月末まで)

遺跡名(市No.)	所在地	調査原因	対象面積(㎡)	調査結果
打出(No.009)	布目	個人住宅建設	250	遺跡なし
打出(No.009)＊	打出	一般県道四方新中茶屋線住宅基盤開発工工事	20	ピット(不明)／弥生土器、土師器(古墳)、須恵器(奈良)
打出(No.009)	布目	市道布目鳥町5号線道路改良工事	1,131	遺跡なし
打出(No.009)	打出	個人住宅建設	661	竪穴住居・土坑(弥生後)、濠(中世)／弥生土器(弥生後～終)、中世土師器・珠洲焼・土師・鉄滓(中世)
今市(No.010)	四方荒屋	駐車場造成工事	454	遺跡なし
今市(No.010)	八町東	個人住宅建設	349	遺跡なし
今市(No.010)	八幡	個人住宅建設	422.9	遺跡なし
今市(No.010)	布目	個人住宅建設	239	土師器(不明)
今市(No.010)	八町	駐車場造成工事	2,941	遺跡なし
今市(No.010)＊	布目	市道八町12号線道路改良工事	74	溝(中世・近世)／土師器(古代)、中世土師器・珠洲焼(中世)、越中瀬戸・磁器(近世)
四方荒屋(No.014)	四方荒屋	駐車場・資材置場建設	1,214	遺跡なし
横越(No.035)	横越	緑地造成工事	3,054	縄文不明土器、土師器(古代)、陶器(近世)
横越(No.035)	横越	緑地造成工事	3,264	溝(古代)／土師器(古代・不明)

宮条南(№043)＊	宮条	市道宮条平榎線道路改良工事	6	土師器(不明)
水橋荒町・辻ヶ堂(№043)＊	水橋辻ヶ堂	市道水橋荒町寺右岸本線改良工事	274	溝(縄文後・弥生中)、土坑(弥生中)、石組井戸(中世)／縄文土器、打製石斧、磨製石斧、石錘、磨石(縄文後)、弥生土器(弥生中)、中世土師器・珠洲焼(中世)
水橋地田館(№052)	水橋地田町	個人住宅建設	300	遺跡なし
願海寺城跡(№066)	願海寺	個人住宅建設	495	堀／越中瀬戸(江戸)、下駄・木製品(不明)
願海寺城跡(№066)	願海寺	個人住宅建設	237.30	越中瀬戸(江戸)
願海寺城跡(№066)	野々上	自動車整備士専門学校建設	4,834	溝(中世)／越中瀬戸・瀬戸・鉄釘・杓子・炭化穀物焼・桃核(中世)、木製品(不明)
願海寺城跡(№066)	願海寺	個人住宅建設	706	遺跡なし
東老田III(№071)	中老田	特別高圧送電線の建替工事	99.2	遺跡なし
高木南(№073)	野口	病院建設	4,556	遺跡なし
極楽寺廃寺(№106)	北代	個人住宅建設	775.4	遺跡なし
吉作長割(№148)	追分茶屋	個人住宅建設	241.36	遺跡なし
新屋敷田(№204)	新屋	個人住宅建設	611	遺跡なし
小西北(№211)	小西	個人住宅建設	331	井戸(中世～江戸)／箒(中世～江戸)
宮成(№216)＊	宮成	市道宮成針原新町線道路改良工事	29	施釉陶器(江戸)
中野(№220)＊	水橋的場	市道水橋的場金尾新線道路改良工事	8	溝・土坑(弥生中)、溝(古代)、ピット(不明)／弥生土器(弥生中)、土師器・須恵器(古代)、木製品(不明)
水橋金広・中馬場(№251)	水橋中馬場	市道水橋金広中馬場線道路改良工事	54	周溝(古墳)、溝・土坑・ピット(不明)
砂川カタダ(№284)	東老田	農機具格納庫建築	86	土坑(古墳)／土師器(古墳)(古代)
西金墨・西金墨廃跡(№293)	古沢	駐車場・資材置場造成	518	竪穴住居・土坑(奈良)／須恵器・土師器(奈良)
大殿城跡(№396)	五福	共同住宅建設	525.58	遺跡なし
富山城跡(№397)	総曲輪	医院建築	805.67	土師器(江戸)
富山城跡(№397)	本丸	富山城址公園整備計画	10,000	堀(徳川、江戸～明治)、探土跡(戦国～江戸)、整地跡(室町～江戸)、土塁(江戸～明治)、築城(江戸)／かわらけ・珠洲焼・越前焼・瀬戸美濃・銅銭(中世)、瓦質土器・鉄器・製鉄炉壁(中世～江戸)、伊万里・木製品(江戸～明治)
池多南(№415)＊	山本	県営畑地帯総合整備事業	247	竪穴住居(縄文中)、穴(縄文)、製鉄炉・炭焼窯(奈良)、焼壁土坑(古代)／縄文土器・剥片(縄文中)、鉄滓(奈良)
開ヶ丘中山III(№441)＊	西押川	県営畑地帯県羽村水山ろく地区アブ・ロック畑地灌漑施設パイプライン敷設	10	縄文土器、剥片(縄文中)
開ヶ丘中山III(№441)＊	西押川	同上	62	縄文土器(縄文中)
開ヶ丘ヤシキダ(№445)＊	開ヶ丘	同上	91.6	不明溝
黒瀬大量(№479)	黒瀬	共同住宅兼店舗建築	649.5	土坑(不明)／土師器(古代)、瀬戸(不明)
黒崎種田(№480)	黒崎	工場建設	964	溝・土坑(中世)／土師器・桃核(中世)
黒崎種田(№480)	黒崎	駐車場造成工事	1,005	土師器(古代)、越中瀬戸・石臼(江戸)、器器(江戸不明)
山室東田(№487)	太田	個人住宅建設	186	土坑・ピット (古代) ／土師器・須恵器 (古代)
泥尾(№531)＊	泥尾	市道宮保泥尾1号線道路改良工事	85	溝(弥生不明)／弥生土器(弥生不明)
布市(№537)＊	月岡	市道上栄線道路改良工事	90	溝・土坑・穴(不明)／唐津焼(近世)、鉄滓(不明)
西番中割B(№549)	西番	本堂・客殿の改築、墓地拡張	1,331	碗器(明治不明?)
境野新南III(№600)	境野新	個人住宅建設	473	土坑(古墳)、溝(不明)／土師器(古墳)
池多南II(№608)＊	山本	県営畑地帯総合整備事業	178	焼整土坑(古代)
計47件				
15年度				
極楽寺廃寺(№106)	北代	寺院建築	310	珠洲焼(中世)
百塚住吉D(№183)	宮尾	個人住宅建設	326	穴・溝(古代)／土師器・須恵器(古代)
豊田中吉原(№197)	豊田	社屋(事務所)建築	391	遺跡なし
新堀西(№224)	水橋新堀	高圧送電線の建替工事	183	遺跡なし
花の木C(№291)	中老田	農道整備工事	152	溝(平安・中世)、土坑(中世)／縄文土器・打製石斧(縄文後～晩)、土師器・須恵器・土馬の足・曲物の底板(奈良～平安)、土師器・珠洲焼・青磁・砥石・古瀬戸・銭貨(天口通宝)・板・箒(中世)、伊万里・越中瀬戸(近世)
富山城跡(№397)	西町・総曲輪	西町・総曲輪地区市街地再開発事業	2,250	井戸・土坑・溝・ピット(江戸)／土師器・越中瀬戸・唐津・伊万里(江戸)
黒崎種田(№480)	黒崎	個人住宅建設	706	遺跡なし
石田打宮(№518)	小杉	駐車場造成工事	521	中世土師器

2　北代縄文広場管理

北代縄文広場を市民に公開し、活用するため、管理運営を長岡校下自治振興会に委託しています。今年度も縄文広場ではさまざまな行事が行われました。（p２・３参照）

3　展示・普及

(1)発掘速報展 2004　「古代人のすまいとデザイン」

①平成 17 年３月４日（金）～３月 11 日（金）

富山市役所１階多目的ホール

②平成 17 年３月 15 日（火）～３月 31 日（木）

富山市民俗民芸村考古資料館

打出遺跡現地説明会

(2)遺跡現地説明会

①打出遺跡　　見学者１２０名

平成 16 年７月 17 日(日)

②富山城跡　　見学者１３０名

平成 16 年７月 31 日(日)

③小出城跡　　見学者８０名　平成 16 年９月 18 日（土）

(3)展示

①奥田小学校ふるさと考古教材展示室

第 10 回展示「むかし・むかしの形と文様(2)～中世から近世～」展

平成 16 年４月１日～平成 16 年 10 月 19 日

第 11 回展示「縄文人の道具(1)～食べる道具、狩りと漁の道具、かざる道具～」展

平成 16 年 10 月 20 日～平成 17 年３月 31 日

②北代縄文広場富山市内遺跡発掘速報コーナー展示

ⅰ　オープン５周年記念展示「縄文まじないの世界」平成 16 年４月 27 日～5 月^30 日

ⅱ　「亀田正夫氏コレクション展」平成 16 年７月 13 日～平成 17 年３月 31 日

③その他

ⅰ　上条公民館文化展　小出城跡、水橋金広・中馬場遺跡出土品 100 点

平成 16 年 11 月３日

ⅱ　倉垣公民館文化祭文化財展示　打出遺跡出土品 13 点

平成 16 年 11 月１日～3 日

ⅲ　池多小学校発掘速報展示　　開ヶ丘地内出土品 80 点

平成 16 年 11 月 14 日

ⅳ　新庄公民館文化財展示　　市内遺跡出土品 80 点

平成 17 年２月 19 日

新庄公民館文化財展示

(4)　資料貸出

新湊市博物館　企画展「富山鞍国時代展」
貸出資料　水橋金広・中馬場遺跡出土双六盤（復元品）１点、双六コマ等（寄贈品）32 点、富山城出土品 11 点、解説パネル１点
会期　平成 16 年４月 22 日～６月 13 日

徳島県立博物館　企画展「石とくらし」
貸出資料　栗山コレクション資料（平村下梨出土ひすい製大珠ほか）２点
会期　平成 16 年 10 月 22 日～11 月 28 日

魚津歴史民俗博物館　企画展「富山の中世城館展～出土品が語る越中戦国紀行」
貸出資料　富山城跡出土品 13 点、小出城跡出土品等 24 点、白鳥城跡出土品 13 点、願海寺城跡出土品等９点
会期　平成 16 年 10 月 19 日～11 月 23 日

富山県埋蔵文化財センター　企画展「とやま史跡めぐり」
貸出資料　史跡北代遺跡写真等２点
会期　平成 16 年 12 月１日～平成 17 年３月 17 日

(5) 講演・研究発表

古川知明　上米沢郷知会 15 年度講演会「富山城跡調査の成果」平成 16 年 3 月 28 日立山町上米沢公民館

古川知明　富山南ライオンズクラブ第 1996 回例会卓話「発掘が語る富山城の歴史」平成 16 年 4 月 23 日　富山電気ビル

鹿島昌也　日本海文化研究所公開講座「遺跡から見た中～近世の川魚漁」平成 16 年 5 月 11 日　とやま市民交流館学習室 CIC ビル

藤田富士夫　日本海学研究発表会「耳飾り文化のルーツを求めて」平成 16 年 5 月 15 日明治安田生命富山ビル

古川知明・宮野秋彦　日本文化財科学会第 21 回大会「復元竪穴住居の保存環境に関する調査研究（第 2 報）（富山市北代遺跡その 2）」平成 16 年 5 月 15 日立命館大学

藤田富士夫　中国玉学玉文化第 4 回学術検討会「日本列島の玦飾の始源に関する考察」平成 16 年 5 月 18～20 日　中国・大連大学

藤田富士夫　富山県民生涯学習カレッジ人間探求講座『環日本海地域の歴史と未来』
「ヒスイからはじまる日本海交流」平成 16 年 6 月 2 日
「海辺の豪族たち～巨大古墳が語るもの」平成 16 年 6 月 9 日
富山県民生涯学習カレッジ高岡地区センター

古川知明　北日本四季の会例会「最新の考古学成果からみた富山の古代史」　平成 16 年 7 月 18 日　富山県知事公館

藤田富士夫　第 3 回中国古代北方文化国際学術検討会議首届紅山文化国際学術検討会「日本列島における佩玉型装身具に関する一考察」平成 16 年 7 月 24～28 日　中国・赤峰学院紅山文化国際研究センター

古川知明　北陸都市史学会第 27 回大会「富山城址の調査から－中世富山城を中心に－」平成 16 年 8 月 1 日　富山県教育記念会館

古川知明　日本海ゼミフォーラム「中世岩瀬湊を探る」「問題の所在」平成 16 年 9 月 11 日　和合コミュニティセンター

古川知明・鹿島昌也　湯山城戦国物語「富山県中世城館の最新発掘成果について－富山城・小出城－」平成 16 年 10 月 9 日　氷見市西念寺

古川知明・千葉元「四方沖海底調査中間報告」平成 16 年 10 月 16 日　とやま市民交流館

藤田富士夫　北日本新聞社「四川文明―三星堆と金沙遺跡の秘宝　解説会」平成 16 年 10 月 24 日　富山県民会館美術館

堀沢祐一　第 2 区城小教研研修会「北代縄文広場」平成 16 年 10 月 27 日北代縄文広場

藤田富士夫　教養講座「古代における日本海交流」平成 16 年 11 月 8 日 富山県立いずみ高等学校

藤田富士夫　「吹上遺跡とその時代－縄文から弥生へ」平成 16 年 11 月 28 日　上越市埋蔵文化財センター

鹿島昌也　北陸中世考古学研究会第 17 回大会「小出城跡発掘調査概要」平成 16 年 12 月 11 日　夢の平コスモス荘

小黒智久　富山考古学会平成 16 年度総会「平成 16 年度富山市打出遺跡発掘調査の概要～弥生時代の焼失住居を中心に～」平成 17 年 1 月 22 日　富山県民会館

藤田富士夫　富山社交倶楽部「翡翠をめぐる日本海交流」平成 17 年 3 月 23 日　富山電気ビル

藤田富士夫　富山シティーロータリークラブ「逆さ地図から見た日本海文化」平成 17 年 3 月 28 日　富山第一ホテル

(6)　講座

①富山市民大学

ｉ）市民の考古学「佐々成政と中世城館」（於：富山市民学習センター）

回	月　日	講　座　題　目	講　師
1	5／11	中世城館を考える	加藤所長代理
2	5／25	金屋南遺跡と安田城	小林主任学芸員
3	6／8	戦国期の富山と佐々成政	加藤所長代理
4	6／22	小出城と水橋の中世城館	鹿島学芸員
5	7／13	現地学習（富山市北東部の中世城館）	鹿島学芸員
6	9／14	中世富山城を解明する	古川専門学芸員
7	9／28	白鳥城と大畠城	小林主任学芸員
8	10／12	佐々成政以後の富山城	古川専門学芸員
9	10／26	願海寺城と太田本郷城	古川専門学芸員
10	11／9	前田氏と近世富山城	加藤所長代理

ⅱ）日本の歴史「変革期と北陸」　（於：富山市民学習センター）

第１回　５月 12 日 首長の台頭と四隅突出墳の時代　藤田所長

第２回　５月 26 日 古代北陸の渡来人とその役割　藤田所長

②市役所出前講座

- 平成 16 年５月 14 日 富山市公民館連絡協議会第８ブロック「考古学から見た神通川下流の歴史」古川専門学芸員（於　八幡公民館）50 名
- 平成 16 年５月 23 日 たんぽぽの会歴史講座「遺跡・出土品が語る富山の歴史」古川専門学芸員（於　町村公民館）70 名
- 平成 16 年７月 21 日 草島町内会「草島周辺の遺跡と歴史」古川専門学芸員（於　高砂会館）60 名
- 平成 16 年９月 28 日 柳町公民館「柳町と富山城」古川専門学芸員（於　柳町公民館）　35 名
- 平成 16 年 10 月 29 日　富山商工会議所「佐々成政と富山城」古川専門学芸員（於　富山第一ホテル）　30 名
- 平成 17 年２月 19 日 新庄校下ふるさとづくり推進協議会　「新庄周辺の遺跡と最近の発掘調査について」小林主任学芸員（於　富山市立新庄公民館）30 名
- 平成 17 年３月４日 富山南ロータリークラブ　「中世岩瀬湊を探る－四方神海底調査から－」古川専門学芸員（於　富山電気ビル）42 名
- 平成 17 年３月７日 上条公民館連絡協議会　「上条地区および富山市内遺跡最新発掘成果について」鹿島学芸員（於 富山市立上条公民館）20 名

(7)　**その他**

①社会に学ぶ 14 歳の挑戦

・出土品整理・遺跡発掘調査業務の体験

奥田中学校（参加者２名）　平成 16 年７月５日(月)～７月９日(金)
新庄中学校（参加者２名）　平成 16 年９月 27 日(月)～10 月１日(金)
北部中学校（参加者２名）　平成 16 年 10 月４日(月)～10 月８日(金)

・北代縄文広場管理業務の体験

呉羽中学校（参加者３名）　平成 16 年６月 14 日(月)～６月 18 日(金)

②インターンシップ（発掘現場体験）

富山商船高等専門学校（２名）　平成 16 年７月 26 日（金）～８月６日（金）

③上条歴史探検ウォークラリー「若王子塚古墳」　藤田所長・鹿島学芸員

上条小学校（50 名）、東京都 大間窪小学校（23 名）他　平成 16 年８月２日(月)

④古沢小学校総合学習「古代人の暮らしについて」　小林主任学芸員

古沢小学校（14 名）　平成 16 年６月 22 日　於：富山市考古資料館

⑤研修会参加等

独立行政法人奈良文化財研究所研修「遺物観察・構造調査過程」小林主任学芸員

⑥新聞記事掲載

2004,3,5　「富山市沖に海底遺跡？」（富山）
2004,3,25　打出遺跡三連彗出土（各紙）
2004,4,8　「江戸期の皿や井戸跡・富山城（西町・総曲輪地区）」（富山）
2004,4,14　「黒部川上流にヒスイ産地？（古川知明）」（北日本）
2004,6,7　「富山は遊戯文化の先進地・遊戯史学会増川会長が論文」（北日本）
2004,6,26　「幻の「鵜野城」跡発見（鹿島昌也）」（北日本）
2004,7,18　「打出遺跡で調査説明会」（北日本）
2004,7,30　富山城跡試掘確認調査（各紙）
2004,9,3　「海底に眠る「岩瀬湊」調査」（北日本）
2004,9,3　「中世岩瀬湊は四方沖」（北日本）
2004,9,16　小出城跡発掘調査（各紙）
2004,9,18　「復元住居の手掛かりに・打出遺跡鳥取環境大浅川教授調査」（各紙）
2004,10,8　「出土建材で構造解明へ・打出遺跡の竪穴住居跡調査」（北日本）
2004,10,9　「北代遺跡で「14 歳の挑戦」・高床倉庫を改修」（富山）
2004,12,20　「回顧 2004　考古学」鹿島昌也（北日本）
2005,1,1　「江戸時代の赤銹明に・総曲輪再開発出土水引・漆など修復」（富山）
2005,1,5　「奈良期の研究を冊子に・フォーラムの成果まとめ」（富山）
2005,2,7　「米展覧会図録に掲載・水橋金広・中馬場遺跡の双六盤」（北日本）
2005,2,16　「縄文の生活の工夫・北代遺跡」（北陸中日）

2005,3,5~6　発掘速報展 2004　「古代人のすまいとデザイン」（各紙）
2004,4～2005,3　「紙面批評」　藤田富士夫（北日本）
2004,3～2005,3　「高志の国」　藤田富士夫（読売）

4　遺跡地図管理

① 新遺跡の追加

661　三熊東Ⅱ遺跡　　試掘確認調査による遺跡範囲の拡大

② 遺跡範囲の変更等

66　願海寺城跡　　試掘確認調査による遺跡範囲の拡大
441　開ヶ丘中山Ⅲ遺跡　試掘確認調査による遺跡範囲の縮小
446　開ヶ丘中山Ⅰ遺跡　試掘確認調査による遺跡範囲の縮小
455　開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡　試掘確認調査による遺跡範囲の拡大
457　開ヶ丘狐谷遺跡　　試掘確認調査による遺跡範囲の縮小
601　開ヶ丘中山Ⅴ遺跡　試掘確認調査による遺跡範囲の拡大

5　寄贈

本庄清志氏蔵書　歴史・考古学関係図書 246 冊

6　資料紹介

金尾遺跡出土品

昭和 32（1957）年に富山市水橋金尾地内で白岩川の河川改修が開始された際に大量に土器が出土しました。富山市立三成中学校に保管され、一部は現在でも中学校に保管・展示されていますが、大部分は（財）水橋郷土史料館にもダンボール箱で約５箱分、保管されていました。

遺物名	点数
弥生土器・土師器（古墳～古代）	3,678 点
須恵器	480 点
珠洲焼	8 点
合計	4,166 点

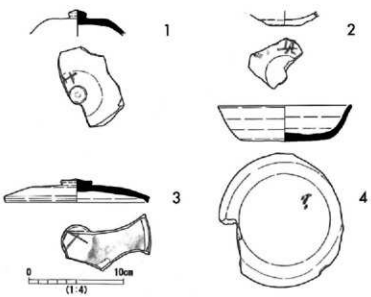
＊点数は破片数

この内、（財）水橋郷土史料館に保管されていた金尾遺跡出土品を当センターで保管することになりました。なお、出土品は現在整理中です。

金尾遺跡は白岩川流域の弥生時代から古代にかけての遺跡の形成と展開を理解する上で重要な遺跡です。

下記の実測図は、現在三成中学校に保管、展示されている須恵器の一部です。中には墨書土器やヘラ書きされた須恵器がみられます。

参考文献：1982 麻柄一志・麻柄幸子「白岩川流域における遺跡群の形成－初期農耕文化の成立をめぐって－」『かんとりい』№6



富山市立三成中学校で保管されている金尾遺跡の出土品

7　研究

(1) **小研究会**(会場：埋蔵文化財センター会議室)

平成 16 年 6 月 8 日　古川専門学芸員　「北代縄文広場復元住居内の環境について」

平成 17 年 2 月 18 日　桜井勝氏(日本テクニカルセンター)「富山市打出遺跡における測量報告－デジタルカメラを用いた三次元計測について」

平成 17 年 3 月 10 日　宮田進一氏(富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所)「越中瀬戸」

平成 17 年 3 月 18 日　酒井英男、岸田徹(富山大学理学部)「モンゴル・アウラガ遺跡の地中レーダ探査による研究と焼飯遺構の検討」
正和紗央里(富山大学理学部)「岩石磁気から遺跡における地震の痕跡を探る研究―打出遺跡・小出城跡の例から―」

(2) **富山県消防防災ヘリコプターの一般行政利用**(富山県経営企画部)

平成 16 年 9 月 7 日堀沢学芸員・鹿島学芸員・近藤学芸員　「富山平野の断層と遺跡の関係を調査」

(3) **論文・報告・紹介**(2004 年 4 月～2005 年 3 月)＊富山市内の遺跡に関連するものも含みます。

堀沢祐一　2004,5　「北陸地域の動物意匠について」『月刊考古学ジャーナル』515　ニューサイエンス社

古川知明・宮野秋彦　2004,5　「復元竪穴住居の保存環境に関する調査研究（第２報）(富山市北代遺跡その２)」『日本文化財科学会第 21 回大会　研究発表要旨集』

贄田明・川崎保 2004,5　「2003 年の考古学会の動向 縄文時代（中部）」『月刊考古学ジャーナル』516　ニューサイエンス社

森原明慶　2004,5　「2003 年の考古学会の動向 古代（中部）」『月刊考古学ジャーナル』516　ニューサイエンス社

高桑登　2004,5　「2003 年の考古学会の動向 中世（東日本）」『月刊考古学ジャーナル』516　ニューサイエンス社

鹿島昌也・福沢佳典　2004,6　「越中の須恵器窯」『須恵器窯構造資料集　2　―8 世紀中頃～12 世紀を中心にして―』窯跡研究会

鹿島昌也　2004,6　「能登の須恵器窯」『須恵器窯構造資料集　2　―8 世紀中頃～12 世紀を中心にして―』窯跡研究会

杉山大晋　2004,6　「北陸の中世鋳鉄製品について－越中の鉄鍋を中心に－」『富山考古学研究　紀要第７号』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

荒川和哉　2004,6　「中尾新保谷内遺跡出土の鉄鉢形土器について―富山県内出土の鉄鉢形土器の集成―」『富山考古学研究　紀要第７号』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

武田健次郎　2004,6　「富山平野における古代基礎地域の再考」『富山考古学研究　紀要第７号』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

森　隆　2004, 6　「鉄製漁具に関する若干の資料―富山県における簪・銛の出土事例―」『富山考古学研究　紀要第７号』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

中村亮仁　2004,6　「任海宮田遺跡の中世墓壙」『富山考古学研究　紀要第７号』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

藤田富士夫　2004, 7　「日本列島における佩玉型装身具に関する一考察」『紅山文化文彙』赤峰学院紅山文化国際研究中心

佐伯哲也　2004,7　「天正 12・13 年における佐々・前田両氏の抗争について」『北陸の中世城郭』第 14 号　北陸中世城郭研究会

古川知明　2004, 8　「富山城跡の調査から－中世富山城を中心に－」『北陸都市史学会第 27 回大会研究発表要旨』

中世岩瀬港調査研究グループ　2004,8　「海中から中世岩瀬港を探る」15 年度海底探査報告『富山市日本海文化研究所報』第 33 号　富山市日本海文化研究所

鹿島昌也　2004,8　「遺跡から見た天文期の神保氏再興過程～鷲野城跡と富山市北東部の中世城館遺跡から～」『富山市日本海文化研究所報』第 33 号　富山市日本海文化研究所

藤田富士夫　2004,8「地域編 北陸Ⅱ」・「時代編 玦状耳飾の遺跡と攻玉」『日本玉作大観』吉川弘文館

藤田富士夫　2004, 9　「日本海沿岸の潟湖から見えてくるもの」『海・潟・川をめぐる日本海文化Ⅰ』日本海文化研究所公開講座平成 15 年度記録集
小林高範　2004, 9　「遺跡からみた河川をめぐる中世の物流」『海・潟・川をめぐる日本海文化Ⅰ』日本海文化研究所公開講座平成 15 年度記録集
坂井秀弥　2004, 9　「中世の主要港　三津七湊の現状と十三湊」『中世十三湊の世界』新人物往来社
藤田富士夫　2004,10「富山市水橋出土の石冠二題」『水橋郷土史料館 25 年のあゆみ―開館 25 周年記念誌―』(財)水橋郷土史料館
古川知明　2004,10　「発掘で初めて解った戦国時代の富山城」『商工とやま』No.555
増川宏一　2004,10　「Ban－Sugoroku:Japan's Game of Double Sixes」『Asian Games The Art of Contest』Asia Society
藤田富士夫　2004,11　「日本玉文化の系譜と諸問題 大陸渡来説を考える」『季刊考古学』第 89 号　雄山閣
藤田富士夫　2004,11　「地域学の先駆的実践『日本海文化シンポジウム』」『地域学から歴史を読む』大巧社
藤田富士夫　2004,11　「環日本海玉文化交流」『2003 年早稲田大学オープンカレッジ秋季講座「日本海学大学公開講座報告書」』早稲田大学・富山県・日本海学推進機構
古川知明　2004,11　「富山・願海寺城」『木舘研究』第 26 号　木舘学会
安達志津　2004,11　「富山・水橋金広・中馬場遺跡」『木舘研究』第 26 号　木舘学会
稲垣裕二　2004,11　「富山・小出城跡」『木舘研究』第 26 号　木舘学会
藤田富士夫・小林高範　2004,11　「富山市米田大覚遺跡の調査と意義」『東岩瀬郷土史会会報』No.93 東岩瀬郷土史会
藤田富士夫　2004,12　「青木重孝先生の思い出―寺地遺跡調査の頃」『青木重孝先生生誕百周年記念　追墓集』
古川知明　2004,12　「富山城跡の発掘調査から」『掘立柱建物から礎石建物へ』第 17 回北陸中世考古学研究会資料集　北陸中世考古学研究会
古川知明　2004,12　「発掘から解明する富山城 佐々成政時代の暮らしぶり」『商工とやま』No.556
高梨清志・塩田明弘ほか　2004,12　「越中の様相」『掘立柱建物から礎石建物へ』第 17 回北陸中世考古学研究会資料集　北陸中世考古学研究会
仁科章　2004,12「福井県林遺跡の土製品について―有孔土版状土製品素描―」『専修考古学』第 10 号 専修大学考古学会
古川知明　2005,1　「江戸時代の富山城のすがた」『商工とやま』No.557
古川知明　2005,2　「富山城と城下町」『商工とやま』No.558
古川知明　2005,2　「富山城跡の調査から―中世富山城を中心に―」『北陸都市史学会会誌』第 11 号
麻柄一志・麻柄幸子　2005,2　「富山市小出遺跡出土の栗林式土器」『富山市日本海文化研究所報』第 34 号　富山市日本海文化研究所
藤田富士夫　2005,2　「縄文時代晩期の円形大型木柱遺構の規格性について」『大境』第 25 号　富山考古学会
古川知明　2005,2　「湊先生と岩瀬天神遺跡」『大境』第 25 号　富山考古学会
安達志津　2005,2　「北陸における稲作文化の受容と貯蔵穴の変化」『大境』第 25 号　富山考古学会
小黒智久　2005,2　「古墳時代後期の越中における地域勢力の動向」『大境』第 25 号　富山考古学会
堀沢祐一　2005,2　「越中国における律令祭祀具と墨書土器について」『大境』第 25 号　富山考古学会
西井龍儀・小林高範　2005,2　「呉羽山古道の調査」『大境』第 25 号 富山考古学会
古川知明　2005,2　「落し穴状遺構の一解釈」『大境』第 25 号　富山考古学会
藤田富士夫　2005,2「書評『桜町遺跡調査概報』『大境』第 25 号　富山考古学会
藤田富士夫　2005,3「富山県極楽寺遺跡」『縄文ランドスケープ』アム・プロモーション
古川知明　2005,3　「富山城石垣が語るもの」『商工とやま』No.559
古川知明　2005,3　「願海寺城下町の推定」『富山市願海寺城跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
古川知明　2005,3　「富山城と時鐘」『富山市民大学 学報 2004』
亀田正夫・古川知明　2005,3　「富山県大沢野町採取の人面付き土器について」『富山市考古資料館紀要』第 24 号　富山市考古資料館
古川知明　2005,3　「人面付き土器微量分析における試料採取について」『富山市考古資料館紀要』第 24 号　富山市考古資料館
上條朝宏　2005,3　「富山県大沢野町採集の人面付き土器の出土遺跡について」『富山市考古資料館紀要』第 24 号　富山市考古資料館
渡辺　誠　2005,3　「富山県大沢野町採取人面装飾付土器の意義」『富山市考古資料館紀要』第 24 号　富山市考古資料館
橋本正春　2005,3　「岡崎卯一先生の著作」『富山市考古資料館紀要』第 24 号　富山市考

古資料館
岸田徹・酒井英男・二宮修治　2005,3　「富山県栃谷南遺跡出土の帯磁率と蛍光X線分析の対比研究」『富山市考古資料館紀要』第 24 号　富山市考古資料館
鹿島昌也　2005,3　「栃谷南遺跡出土軒丸瓦の帯磁率と蛍光X線分析を受けて」『富山市考古資料館紀要』第 24 号 富山市考古資料館
鍋谷仁美　2005,3　「越中の双子瓶」『富山市考古資料館紀要』第 24 号 富山市考古資料館
広岡公夫・小暮亮宣・金井友理・川崎　一　2005,3　「富山市茶屋町遺跡製鉄炉の考古地磁気研究」『富山市考古資料館報』第 42 号　富山市考古資料館
高梨清志　2005,3　「遺跡範囲の把握と認識―試掘・確認調査の精度向上のために」『富山市考古資料館報』第 42 号　富山市考古資料館

補足（2003.3～2004.3）
川崎晃 2003,3 「古代北陸の宗教的諸相―越中を中心として―」『越の万葉集』高岡市万葉歴史館論集 6
永田恵子 2003,11「建築書系道具雛形における双六盤の設計論および歴史的特質」『技術と文明』第 26 冊 14 巻 1 号
鈴木正博 2004, 1 「「櫃原式」から「唐古式」へ―「木葉文」生成の型式構えは如何にして形成されたか―」『古代』第 114 号　早稲田大学考古学会
藤田富士夫　2004,3　『環日本海の玉文化の始源と展開』敬和学園大学人文社会科学研究所
藤田富士夫　2004,3　「古代越中国新川郡の「道」と「郷」に関する若干の考察」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』第 2 号
藤田富士夫　2004,3 「翡翠大珠の複数埋納の現状と課題」『玉文化』創刊号　日本玉文化研究会
富山市教育委員会 2004,3　『フォーラム 奈良時代の富山を探る―「奈良時代の富山を探る」フォーラム全三回の記録―』
根津明義　2004,5 「越中国」『日本古代道路事典』古代交通研究会
藤田富士夫　2004,3「日本海をめぐる玉文化」『WAの海』NPO法人 環・日本海
加藤遵行・古川知明　2004,3 「中世富山城の考古学的調査に基づく考察」『富山史壇』第 142・143 合併号
大野安希・奥山優一・坂爪彩子・田丸司・橋本博文・森合桂子　2004,3 「新潟大学考古学研究室 2003 年粟島調査報告」『佐渡・越後文化交流研究』第 4 号

発掘調査報告書等（2004 年度）

139　富山市富山城跡発掘調査報告書
140　富山市水橋荒町・辻ヶ堂遺跡発掘調査報告書
141　富山市池多南遺跡発掘調査報告書
142　富山市内遺跡発掘調査概要Ⅵ
143　水橋専光寺遺跡発掘調査報告書
144　富山市願海寺城跡発掘調査報告書
北代縄文通信　第 17 号
北代縄文通信　第 18 号
富山市の遺跡物語（富山市教育委員会 埋蔵文化財センター所報 No.6）

埋蔵文化財センター組織

所　長1 ―― 所長代理1 ―― 専門学芸員1 ―― 主査1
（生涯学習課主幹）　　　　　　　　　　　　 ― 主任学芸員1
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 ― 学芸員3 ― 嘱託2
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 ― 学芸員2 ― 嘱託2

事業費
①埋蔵文化財調査費　　178，200千円
　発掘調査5遺跡、市内試掘確認調査、市内出土品整理
②体制整備・一般管理費　　10，395千円
③普及活動費　　300千円
　発掘速報展開催
④遺跡・史跡保護管理費　　8，405千円
　北代縄文広場管理、北代縄文広場復元建物修理

平成 17（2004）年4月1日に富山市は、婦中町・大沢野町・大山町・八尾町・山田村・細入村と合併し、新・富山市としてスタートします。埋蔵文化財に関する事項については、全て新・富山市教育委員会埋蔵文化財センターが窓口となります。

研究余話Ⅶ

縄文時代の擦切技法について

藤田富士夫
(埋蔵文化財センター所長)

はじめに

本稿に掲げた図面を書斎に埋もれた古封筒の中から発掘した。大学を出て間もない頃に作成したもので 30 年は経ている。その昔、某会誌に投稿したがボツとなった原稿に添えた図である。その時の原稿を探したが見当たらない。図もほかに数枚作成したはずだが見当たらない。それでも論旨の課題は、ずっと頭にあって今でも継続している。肩の張らない「余話」コーナーに甘えて旧稿を最構成することとした。新資料を加えて図を作り直そうとも思ったが最近細かな作業をする気力が無い。古図であるが基本的構想は変わらない(つまり進歩が無いといったことでもあるが)のでお許しいただきたい。

擦切技法の波及論

擦切技法について八幡一郎博士の先駆的研究がある。1936 年に発表された「東京人類学会日本民族学会連合大会第一回記事」である。この時の「石斧における擦截手法」と題した発表稿は、名著『日本の石器』(八幡 1948 年)に収録された。擦切技法による「磨製石斧は北海道全土特に渡島半島附近に多く、また内地では陸奥及び羽後に多く発見される」とし、「現在知られている範囲では、擦截による石斧の分布の西南端は飛騨である。北海道および奥羽北部の擦截石斧の原料は十中八九までグラウコフェンシストと呼ばれる濃緑色堅緻の石である」と書き、擦切技法とグラウコフェンシストとの密接な関係を力説する。そして中部、関東においては同じく緑色をおびる蛇紋岩が選択されているとする。このような分析から、擦切手法の源流はシベリアの青緑色のネフライト製磨製石斧にあって、グラウコフェンシスト製の北海道、奥羽北部は第一次分布、蛇紋岩製の中部、関東は二次分布したと壮大な波及論を展開した。

かかる擦切技法の波及論にそって寺村光晴博士は硬玉製大珠を検討した。「嘗って大珠の解体、分割に際して用いられたと言われた截切手法は、原石より大珠製作に際しての整形の過程における一工程としてなされた」(寺村 1965 年)とし、①有孔飾玉類にみられる穿孔技術の発達・盛行、②文様に顕示される竹管状具の盛行、③堅緻な石材を対象とする擦切技術にみられる媒材使用の盛行、この三者が時期的地域的に合致する新潟県西南部、富山県北東部に硬玉使用が始まったと説いている(注 1)。

また、金子拓男氏は斜刃石斧と擦切技法の関係を説いた(金子 1969 年)。石川、新潟、長野県出土の斜刃石斧 9 点を集成し、「刈羽貝塚のものは別として、図示した八個の石斧は古くは中期初頭の剣野E式、下っても中期中葉の馬高期を下限とすることが知られるのである」とし、「斜刃石斧と擦截技法とは密接不可分の関係であり、斜刃石斧が擦截技法によって」作られた、と説いた。八幡一郎博士の論旨に沿って、「斜刃石斧及び擦切石斧は東北文化流入にともなって新潟県に伝播したのであろうし、又その時期は中期初頭を上限とする時代であったとの可能性は強い」とした。

もう一つの擦切技法

一方、次に記すように八幡一郎博士による波及論のパラダイムに乗らない例もある。

a. 早期の擦切技法　栃木県の普門寺遺跡に見られる(酒詰・渡辺 1949 年)。これは生前の山内清男博士から教示を得た。本遺跡では厳密な分層発掘が行われており、「未成擦切石斧かと思われる」石器が「最下層にちかい」位置から出土した。最下層には無文土器があり、次いで撚糸文、そして押型文が出土している。山内博士は、本資料に高い信頼性を寄

せておられた。ほかに新潟県の小瀬が沢洞窟で「胴に縦の擦り截れ痕跡を研ぎ残している」(中村 1978 年)石斧がある。これは早期押型文に伴ったと見られている。

b．縄文前期の擦切技法 縄文前期後葉～末葉の土器を出土する富山県立山町の吉峰遺跡では小型の蛇紋岩製磨製石斧の製作に普遍的に擦切技法が認められる(第１図１～４)。また中期初頭以降とされる斜刃石斧(第１図５)が出土している(なお１～５はいずれも筆者の表採資料である)。また、岐阜県国府村の村山遺跡(塩谷・大野 1960 年)は縄文前期の黒浜式から十三菩提式併行期の遺物が発掘され、諸磯ａ．ｂ式や北白川下層式併行の土器が豊富である。伴出土器は判然としないが擦切痕跡のある石斧と未成品が出土している(第１図６・７)。石質は、６が緑色変成岩で７が結晶片岩と報告されている。

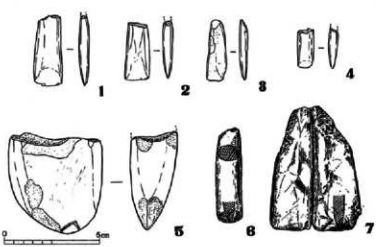
このように少なくとも富山から飛騨地域にかけての縄文前期には、蛇紋岩やその類似岩の石斧への擦切技法が普遍的に存在している(注２)。

c．玦飾の「切目」作出 縄文早期末葉～前期初頭に現れる玦飾[いわゆる玦状耳飾]の切目作出に擦切が用いられている。製作遺跡は北陸に集中しており、富山県の極楽寺遺跡や明石Ａ遺跡、天林南遺跡、新潟県青海町の大角地遺跡などがある。素材には滑石やロウ石が用いられている。ちなみに縄文前期後葉には蛇紋岩製玦飾が出現する。玦飾の滑石、ロウ石と擦切石斧の蛇紋岩は、いずれも姫川中流域の蛇紋岩地帯に産出する。玦飾製作遺跡の分布と重なって擦切痕跡を有する蛇紋岩製石斧の製作遺跡が盛行する。

d．鹿角製品の加工 鹿角製品の第一次加工に擦切技法が用いられている。このことは早くに桑山龍進氏が指摘している(桑山 1943 年)。鹿角製品それ自体は草創期から認められており、たとえば草創期後半の神奈川県夏島貝塚から鹿角製の釣針など良く知られている。桑山氏の指摘に従えば、これも擦切技法による製作の蓋然性が高い。

※これらの事例から、仮に八幡一郎博士による波及論が成立するとすれば、北陸へは東北で盛行する縄文前期段階にはすでに到達していることとなる。つまり擦切技法の東北から北陸への段階的波及論ではうまく整理できないように思われる。

ａ～ｄに示したように八幡博士が指摘する擦切技法の波及以前に縄文列島では擦切技法が普遍的に用いられていた。たしかに早期の北海道や東北では典型的な擦切石斧が存在する。しかし、また飛騨から富山では前期後葉に擦切技法による石斧が存在する。それらの



第１図　立山町吉峰遺跡（1～4. 小型磨製石斧）（5. 斜刃石斧）
岐阜県村山遺跡（6～7. 擦截石斧、塩屋・大野1960より）

石斧には新潟県姫川流域の蛇紋岩地帯の原石が多用されている。姫川流域とその周辺地域では、前期後葉の玦飾に蛇紋岩の使用が始まる。

当地における擦切技法による蛇紋岩製石斧の生産は、北海道や東北地域の擦切技法の波及とは異なって、玦飾生産における技術が蛇紋岩素材加工へと転用されて開始されたとする仮説は検討に値しないだろうか？ 擦切技法が一元論で解釈できるのかそれとも多元論なのか？ 大局的視野で、かつ多様性を踏まえての議論が必要であると思われる。

おわりに

ここに古図の発掘を機に、当時の思考そのままで進化することなく書きつづった。突飛かもしれないが北陸の磨製石斧擦切技法に、同地域に先行した玦飾文化の擦切技法の影響があると推考している。この突飛さがかつてボツとなった理由だとも承知している。それでも、なおこの関係に拘泥するのは前期の玦飾製作文化圏と中期の蛇紋岩製石斧製作圏とが同域で重なり合うからである。「擦切技法」の理解は、北陸の縄文文化論を展開する上で避けて通れない課題であるとも思っている。それは、これからも私の頭の中に未消化の課題として残りつづけていきそうである。大方のご批正とご教示を頂ければ幸いである。

注１） その後、寺村光晴博士は新潟県青海町の寺地遺跡の硬玉の攻玉技術を考察し、「本地方にみられる擦切技法は、現在のところ蛇紋岩においてのみ検出されている(337頁)」（寺村ほか 1987 年)としている。また、寺地遺跡では硬玉への擦切技法の実施は認められていないとも説いている。鈴木克彦氏は、青森県川内町野家遺跡の硬玉製大珠は擦切技法で「半截」されていると指摘している(鈴木 2001 年／ 48 頁・53 頁)。また、青森県三内丸山遺跡の緒締型大珠の中に鏗節型大珠を横位で輪切りしたかのようなものがある(同 50 頁)。現状では、硬玉製大珠と擦切技法との関係は青森県や岩手県(御所野遺跡)で僅かに認められるが普遍的ではない。原産地から遠く離れた東北地域に限定的に見られる現象の感がする。

【訂正と留意―『火炎土器と翡翠の大珠』(鈴木 2001 年)に掲載された富山市教育委員会(富山市考古資料館)蔵の「翡翠大珠」【40 頁 112】に擦切痕が認められる。これについては同書【39 頁 108】および【40 頁 113】とともに、近年製作された「参考品」が誤って貸し出されたことによる。また３点ともに「富山県」出土とあるが事実でない。なお、このことは資料を借用され図録を編集された青森県立郷土館の責任ではない。機会があれば経過について記したいと思っている。―】

注２)縄文前期後葉の富山市平岡遺跡でも蛇紋岩製の小型磨製石斧の製作に擦切技法の痕跡が確認できる(婦中町 1997 年)。

注３) 八幡一郎博士は、1936 年の論考で「前期ないし中期の遺跡からしばしば発見される玦状耳飾の切目が、この(擦截)手法によっていることなども興味がある」(八幡 1979 年)としているが、その後の擦切論では触れられていない。

参考文献

金子拓男 1969 年「中部地方における斜刃石斧と擦截技法」『古代文化』第 21 巻第３・４号　古代學協會
桑山龍進 1943 年「日本新石器時代の鹿角の於ける加工技術」『民族學研究』第 1 巻第 6 号
酒詰仲男・渡辺仁 1949 年「栃木県委村菩門寺遺跡発掘概報」『人類学雑誌』第 61 巻第 1 号
塩屋雅夫・大野政雄 1960 年『村山遺跡』愛友中央印刷株式会社
鈴木克彦 2001 年『火炎土器と翡翠の大珠―土の芸術、石の美、そして広域交流―』青森県立郷土館
寺村光晴 1965 年「硬玉製大珠論―源流と攻玉技術と文化―」『上代文化』第 35 輯　上代文化研究会
寺村光晴・青木重孝・関雅之 1987 年『史跡 寺地遺跡』新潟県青海町
中村孝三郎　1978 年『越後の石器』学生社／83 頁。
婦中町 1997 年『婦中町史　資料編』／９頁。
八幡一郎　1948 年『日本の石器』彰考書院
八幡一郎　1979 年「日本新石器時代初期の石器」『八幡一郎著作集 第二巻縄文文化研究』雄山閣

研究余話Ⅷ

富山城石垣調査から

古川知明
（埋蔵文化財センター専門学芸員）

1　富山城の歴史

富山城は、旧神通川（現松川）と馳川の合流点に立地する。富山城築城は越中守護代神保長職によるもので、その築城年代は久保尚文氏による天文 12（1543）年説が最有力である。天正 6（1578）年神保長住が富山城に入り、その後佐々成政が居城した。天正 13 年成政を降した豊臣秀吉によって城は破脚され、中世富山城は終焉する。慶長 2（1597）年に前田利長が入り、以後本格的に城・城下の整備に着手したとされている。

慶長 2(1597)年利長はいったん入城するが 2 年で金沢へ戻り、慶長 10(1605)年再び居城する。慶長 2～4 年の間に城の整備を行なったという記録は認められないが、建物整備等はすでに始めていると考えられる。慶長 10 年には、御屋形修造、縄張普請の間数・石の積りを開始し、また県境の飛騨横山へ修築用材（赤松材）の手配を始めており、城・城下の本格整備に着手したことがわかる。その後用材は能登羽咬山（羽咋市）にも求められ、越前・若狭大工が手配され進められた。しかし城と城下町のほとんどは慶長 14 年大火で灰燼に帰した。

本稿では慶長 10 年から開始されたと見られる石垣築造の概要と、築石にみられる刻印について、調査途中ではあるが最新調査成果を示すものである。

2　石垣の現状

江戸期各絵図でも示されているが、石垣が設けられたのは、南側の本丸大手枡形虎口、東側の本丸搦手枡形虎口、二の丸西側枡形虎口の 3 ヶ所であり、その他の部分はすべて板塀を設けた土居（土塁）であった。石垣上にはかつて櫓等が存在したが、大火などで江戸末には存在していなかったとみられる。現在、二の丸西側枡形虎口石垣は存在せず、富山産業大博覧会に伴う昭和 28 年の工事で、石垣の一部積み替え、模造天守の建設、土塁部分へ新たに石垣設置などにより、江戸期の石垣は本丸大手枡形を除いて大きく変えられているとみられる。大手枡形石垣には大手道に沿って 2m を超える巨石「鏡石」を数個配置する。

3　石垣の築造について

現存する石垣が最初に築造された年代は必ずしも明確でないが、慶長 10 年に縄張普請の間数・石の積りをさせており、この石が石垣築造のための石材のことをさすとみられる。したがって初期石垣は慶長 10 年以降に調達・築造されたものとみられる。鏡石の存在も慶長後期の特色と位置づけられ、このことを裏付けている。

石垣で最も遺存状況が良好なのは大手枡形の南面する石垣である。枡形面には合坂・雁木をもつ。築石は、合坂間の石垣下部では割面にノミ加工を施さない、あるいは一部のみ面加工を行う大型の石を用い、石垣上部では筋ノミ加工による平面作出が顕著な小型の石が多く用いられている。前者は火災による石表面の剥離が著しく、今後より詳細な観察が必要である。金沢城における石垣と比較すると、前者は慶長後期（1605～1614）、後者は元和～寛永期（1615～1644）頃の加工技術に類似する。富山城では元和・寛永期の石垣修築記録はなく、万治 2(1659)年の大地震の修復として万治 3～寛文元(1661)年にかけて修築したという記録があり、この年代に大幅に築石を積み替えた可能性を考えたい。

その後の藩政期における孕みの修復や積直しは、金沢城における穴太衆に代表される専門集団を擁する財政的余裕はほとんどなかったため、在地の石工が既存の築石を再利用して実施したとみられる。その結果として禁じ手とされる笑積が随所に発生、また間隙も多

く見られるようになり、石垣構造の弱体化が促進されたとみられる。この時期金沢城では主要施設土台等で一部切石を採用し始めるが、富山城では最後まで切石積みが採用されることはなく、また時期は不明だが、円礫をそのまま築石として使用している部分もあり、修復痕からみてこれらの状況を裏付けるものと推定する。

鏡石は面の一部に大型の筋彫を施すものがある。これは築造初期の面整形ともみられるが、今のところ幾度かの積直しの際微細な面合せをノミ加工によって調整したものと考えておきたい。

4　既往の石垣調査・研究

富山城石垣に関する研究は、これまで刻印に関することが主であった。1966 年の塩照夫氏による刻印調査（塩 1994）が唯一全体的に行なわれたものであり、これ以外に大手枡形隅石にある星形の刻印を発見した藤田富士夫氏の報告がある。このほか刻印は高瀬保氏や京田良志氏が調査されたことがあると聞くが、報告は未完のままである。鏡石については、京田氏により 1 個の大石を 4 枚に割って使用しているという重要な指摘がある（京田 1997）。

5　刻印について

塩照夫氏の調査では 10 種 22 個が報告された（塩前掲）。現在測量途中ではあるが、2005 年 1 月末現在確認した刻印は 87 種 254 個（表 1）である。「十」「口」「コ」「⊗」「C」「卍」「田」の順に多い。刻印は割面に認められるもの、礫自然面に認められるものがあり、前者が多い。割面刻印には、割った後ノミ加工を行なって整えた後に刻まれるものが多い。刻印は 1 面に 1 個のもの、異種 2～3 個を施すものがある。刻印全体としては小ぶりであり、大きめの築石割面に小さな「十」を刻むものが多く認められ、これらは慶長期段階とみられる。細く深く印刻するものと、幅広で浅く印刻する 2 種が存在するが、後者は花崗岩の石表面が帯火による剥落で劣化した結果であるとみられるほか、一部整形痕である可能性のものを含んでおり、特に「C」字形のものは今後判断に注意を要する。

刻印が確認しにくかった理由としては、(a)積直しにより刻印が石垣裏側へ隠れた、(b)数度の大火で築石表面が剥落した、(c)積直しの際の面合せなど二次的な表面のノミ整形により除去された、(d)刻印が浅く読み取りが困難であった、等の要因が考えられる。なお、利長が慶長 15 年に築造した高岡城の土橋石垣においては、相当数の刻印がみられており（西井 2004 ほか）、富山城と共通する刻印は 10 種に及ぶ。高岡城では約 3 割に花崗岩を使用しており、早月川産と推定されている。肉眼観察では築石の多くが富山城と類似した様相を示しており、石材獲得の共通性が看過される。

金沢城では田端寶作氏による慶長後期から寛永期の刻印の調査が行なわれ、592 種 1441

表 1　富山城石垣にみる刻印（2005年 3 月現在）

個が確認されている。今回調査と分類基準が異なるが、個別的には富山城と30種が共通する。先述の富山城で多数所在する刻印は、ほとんどが金沢城においても認められている。

6　丁場について

富山城石垣の築石は、約70%が花崗岩、残りが安山岩である。それらは大型の自然石を2～4ツ割にしたものであり、その石材はほとんどが河川転石である。石垣は度々の大火で変質しているが、肉眼観察では花崗岩は早月川を中心とし片貝川・黒部川、安山岩は常願寺川が主産出地である可能性が高い。各河川では砂防ダムなどの設置により大型礫の獲得可能流域が当時と異なると推定されるが、石材として使用可能な80cmを超える転石は現在でも中流域で十分獲得できるが、隅石や鏡石の獲得は上流域まで遡る必要があろう。常願寺川では陸路を経て鵜川の利用、早月川では陸路を経て舟運を利用し、海岸を経由して岩瀬から神通川を遡上するルートが想定できる。

現在帯磁率測定・顕微鏡観察などの理科学分析を行い、河川流域産地同定を試みている（富山大学酒井英男研究室と共同研究中）。

7　石工について

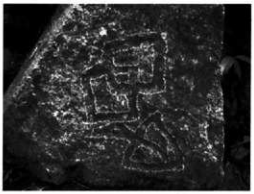
越中立山古文書に、初代藩主前田利次の正保年間（1644-1648）、芦峅寺の橋台石垣築造工事に際し、金沢から「石切穴生」工人を呼び寄せている（木倉編 1982）。利次は加賀藩3代藩主前田利常の二子であり、宗藩との血縁の強いつながりの中で技術者の招請を行えたものとみられる。橋台とはおそらく布橋の橋台と推定されるが、現在は残っていないとみられる。このように富山藩における金沢の穴生衆の関与は利次段階では確実であることから、慶長期に利長が整備した富山城初期石垣の築造においても金沢穴生衆が深く関わったことは疑いのないことであろう。

本稿の作成にあたり、西井龍儀氏、冨田和気夫氏、宮田進一氏、上野光氏の有益なご教示を得た。

参考文献

加藤達行　2003　「富山城東出丸について」『富山市の遺跡物語』№4　富山市教育委員会埋蔵文化財センター
加藤達行　2004　「富山城の破却について」『富山市の遺跡物語』№5　富山市教育委員会埋蔵文化財センター
加藤達行・古川知明　2004　「中世富山城の考古学的調査に基づく考察」『富山史壇』第142・143合併号　越中史壇会
金森久一　1935　『富山城の起源』
木倉豊信　1982　『越中立山古文書』国書刊行会
京田良志　1997　『続石の表情』　桂書房
佐伯哲也　2004　「中世富山城について」『富山城跡試掘確認調査報告書』富山市教育委員会
塩　照夫　1972　『富山県の歴史　越中の古城』　北国出版社
塩　照夫　1994　『北国街道の城』北國新聞社
高岡工芸高等学校地理歴史クラブ　1964　『足跡』68
高岡　徹　1980　「富山城」『日本城郭体系』7　新人物往来社
高岡　徹　1987　「第三節　神保氏再興と富山築城」『富山市史　通史上巻』
高瀬　保　1975　「加賀藩初期の飛州北方材調達について」『地方史研究叢書4近世越中の社会経済構造』名著出版
高瀬　保　1975-1977　「近世の富山城下町(1)～(4)」『富山史壇』第61-66号　越中史壇会
田端實作　1976　『金澤城石垣刻印調査報告書』
富山市教育委員会　2004　『富山城跡試掘確認調査報告書』
富山市教育委員会　2004　『平成16年度富山城跡現地説明会資料』
富山市郷土博物館　1999　『特別展　富山城の歴史展』
西井龍儀　2001　「富山県産瓦の変遷」『北陸の瓦の歩み』社団法人日本セラミックス協会北陸支部
西井龍儀　2004　「虻が島と高岡城の石垣」『富山市日本海文化研究所紀要』第17号
深井甚三　1995　『近世の地方都市と町人』吉川弘文館
深井甚三　1995　「要害に囲まれた富山城下」『城下町古地図散歩1　金沢・北陸の城下町』平凡社
古川知明　2004　「富山城本丸採集の瓦について」『富山市の遺跡物語』№5富山市教育委員会埋蔵文化財センター
古川知明　2004　「富山城跡の調査から一中世富山城を中心に一」『北陸都市史学会第27回大会研究発表要旨』

←卍形の刻印



↑２種類の刻印

↑富山城で最も多い十字形の刻印

大手石垣の星形刻印→

研究余話IX　富山市内最新の出土漆器について

近年、富山市内の沖積平野部の発掘調査で鎌倉時代から江戸時代の集落や城館遺跡で多くの漆器製品が出土した。この程、国内の遺跡出土の漆器に詳しい漆器文化財科学研究所の四柳嘉章所長にこれらの遺跡から出土した漆器について、多くのご教示をいただきましたので、含めてご報告させていただきます。

●水橋金広・中馬場遺跡（鎌倉～戦国時代・12 世紀末～16 世紀）

遺跡は南北約 500mの範囲に、大溝で区画された屋敷地に掘立柱建物や井戸、竪穴状遺構などが配置される館が形成されています。遺跡の北部～中央部は戦国～江戸時代前期を中心とした時期の遺構や遺物が検出されています。遺跡の南部は鎌倉～室町時代までの遺構や遺物が検出され、やや古い時期に館跡が形成されていました。

①12 世紀末～13 世紀初頭（鎌倉時代初期）の漆器

無紋の皿が出土しています。底部に高台が付かず、露胎（下地を塗っていたがはげた状態のもの）となっているのが特徴です。

②13 世紀（鎌倉時代）の漆器　「桐＋竹」の文

様(1)が両面に描かれた漆器は鎌倉で作られた可能性があり、非常に丁寧な作りです。佐助ケ谷遺跡(神奈川)に類例があります。「亀甲に花角+竹」の文様(2)は非常に珍しい文様構成です。亀甲文は家紋などの意匠で使われることが多く、花角（かたばみ）は繁殖力が旺盛なことから吉祥文として用いられたようです。

③14 世紀（鎌倉～南北朝）の漆器　無紋の椀があります。

④15 世紀（室町時代）の漆器　朱漆の大椀は最上級の漆下地を用いて製作されたものです。口縁部は布着せを行い、端反りされており、金属器を模倣した製品の可能性があります。また、内面に薄く熱を受けた跡が見られ、蜀台に転用された可能性が高いです。この漆器は 15 世紀前半以前に製作されたものですが、漆器が出土した遺構は江戸時代の遺物が出土しています。このような高級品は伝世して何十年、百年以上使用されていた可能性があります。一般的な名主クラスでは入手できない製品であり、寺院や武将の館以上の施設で使用されていたと考えられます。類例として、福井県一乗谷朝倉氏館跡や岐阜県江馬氏館跡、新潟県水久保遺跡で出土しています。富山県では類例がありません。福光町梅原胡摩堂遺跡では多数の漆器が出土していますが、このような高級漆器は出土しておらず、漆器から見たら、同遺跡は一般的な集落遺跡と考えられます。文様がある漆器が 1 文で買えるとしたら、この製品は 100 文～数百文の値がある製品です。

一方、井戸祭祀に用いられた無紋の漆器椀もこの頃（14 世紀末～15 世紀）の製品です。

⑤16 世紀（戦国時代）の漆器　「四つ葉桔梗」の漆器があります。桔梗は五つか三つのものが多いのですがここでは四つ葉になっており、めずらしいものです。

水橋金広・中馬場遺跡出土の漆器は鎌倉～戦国時代までの中世の全般を通じて出土しており、越中のみならず北陸の漆器の変遷を知る上で大変貴重な資料です。　（鹿島昌也）

●八町Ⅱ遺跡（鎌倉時代・14 世紀）

八町Ⅱ遺跡では「千鳥文」が描かれた漆器が出土しました。これは北陸初の出土となります。鎌倉では蒔絵意匠を雑器に取り入れることは多く見られ、千鳥の文様も多く描かれています。それらの漆器は基本的に赤漆に朱が使用され、ベンガラが使われることはありません。今回出土した漆器は朱で描かれ、さらに鎌倉で見られる千鳥の文様(重要文化財「千鳥蒔絵面箱」13～14 世紀、野村美術館蔵）に極めて類似していることなどから、県内ではなく、鎌倉で生産された漆器が搬入され、使用されたと推測されます。遺跡は 14 世紀頃、鎌倉から漆器を取り寄せて使用することのできる人々が暮らす拠点的な集落だった可能性があります。

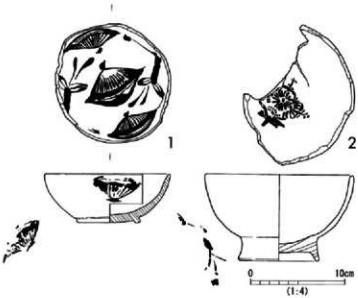
●小出城跡（戦国時代・16 世紀）

小出城跡では戦国時代の外堀・内堀あわせて約 200 ㎡の狭い範囲から平成 15・16 年度あわせて約 60 点の漆器が出土しました。次頁の「菊花」が施された漆器(2)や「扇」に房と飾りとが揃って表現された漆器椀(1)は貴重な資料で、非常に丁寧に描かれています。

一方、漆器椀の高台部分のみを意図的に切断したものが出土しました。一部穴が開けられ、赤と黒の漆で塗り分けられ、塗りが上質なことから、高級な漆器椀を合子か香炉の蓋に転用したようです。また、高台裏面に「三ツ星文」が描かれた漆器が 2 点出土しました。うち 1 点は火を受けた痕跡がありました。漆器を廃棄する際、焼却することがあるようで

す。この漆器は形を保ったまま部分的に焦げ、小穴を開けていることから、椀以外に転用された可能性があります。

昨年度調査で「松」が描かれたほぼ同形の小皿が2点出土していました。今年度調査でも同じ「松」の文様が描かれた同形の小皿が1点出土しました。漆器皿は中世の普及食器である三ッ皿（組皿）と考えられます。



他にも、中央に簡略化された「鶴丸」を描き、その周りに「山」をイメージさせる文様が描かれた漆器が新たに出土しました。

また、「牡丹＋鶴」は他に類例がなく、「傢」、「鶴丸」、「笹」などいずれも吉祥を表す文様を施した漆器が多数出土しました。

小出城跡からは普及品である渋下地の漆器から、漆下地で塗りの精度が高い良質な漆器が出土しています。漆容器と考えられる曲げ物などが出土しており、城内に漆職人を招き、日常食器から高級漆器まで製作し、使用していたことが推測されます。（稲垣裕二）

研究余話X　地震と考古学について

鹿島昌也
（埋蔵文化財センター学芸員）

昨年9月、埋蔵文化財センター職員が新潟県十日町市立博物館を訪れ、免震装置に乗った国宝の火焔土器（縄文）を目にし、他の展示品と違う厚遇に感心していた。

その翌月、新潟県中越地震が発生し、この火焔土器が破損したとの新聞記事を目にした。免震装置の機能を上回る規模の地震によって、多くの文化財も被災した。

現地では地滑りや液状化現象がみられ、強い衝撃のあったことを示している。この液状化が注目され出したのは、奇しくも1964年東京オリンピック直前の日本列島を震え上がらせた「新潟地震」からである。

遺跡に残る地震痕跡

日本列島で、地震の原因となる活断層は各地に存在し、どこでも地震が起り得る。

遺跡を発掘すると、過去に発生した夥しい数の地震痕跡が検出される。小矢部市の若宮古墳では墳丘に小さな地滑りの痕跡が多く確認され、福岡町の木舟城の城下町では石組み井戸を引き裂いて噴砂の砂脈が確認されるなど、様々な現象が残されている。

地震考古学

（独）産業技術総合研究所関西地質調査連携研究体長の寒川旭氏にお聞きしたところでは、液状化が検出された場所に起る地震には数百～数千年単位の周期があるという。富山では1585年（天正地震）、1858年（安政の飛越地震）に液状化を発生させたM6級以上の規模の地震の記録がある。その周期を知っておけば現代の人々が生きてる間の富山は大丈夫だろう。遺跡で地震痕跡が発掘されたとしても無闇に恐れる必要がないと教えられた。

寒川氏は、「過去の地震を実証的に解明しながら、人々の歴史の中に位置付け、将来の生活に役立てる」をコンセプトに「地震考古学」を1988年に提唱された。

高岡市手洗野赤浦遺跡や岩坪岡田島遺跡では、幅数cmから1m近い砂脈が数多く検出されている。後者では、江戸時代の遺物を含む地層を引き裂いて砂脈が見られることから、安政の飛越地震によるものと推定されている。

地滑りや噴砂の痕跡はM6級以上の力が地面に加わり現れるという。その地面を覆った堆積土が確認できれば、それ以前に地震が発生したことが分かり、堆積土に含まれる土器や陶器などの年代以前の地震と判断できる。

地震の痕跡が残る地層を考古学的な視点で調査することによって地震の起こった年代や規模を推定することができる。

あわせて、地滑りや砂脈が起こった箇所の考古地磁気を測定する（土層中の磁気を帯びた粒子の磁力の強さなどによって年代を測定する方法）ことで地震の発生年代を推定する科学的な調査も富山大学理学部と協力して進められている。

地震の2次災害

新潟県中越地震で、山古志村など山間部に生じた天然ダムをみて、富山県民は、安政地震後、常願寺川の川底を押し上げ、流域で甚大な土砂災害を被った大鳶・小鳶山崩れが起こったことを思い出した方が多いのではないか。

常願寺川中流域の右岸に位置する富山市水橋二杉遺跡では、近世期の遺構を覆って厚さ約10cmの粗砂を含む堆積層が確認された。

富山市水橋の若王子塚周辺を調査した際に、地元の方から常願寺川や白岩川が溢れた時、住民は築山に逃れて家が水に浸かる様子を見ていた、との話を聞いた。築山とは、古墳のことで、墳丘上部には中世～近世期に砂質土でかさ上げされた痕跡がうかがえる。先人が残した古墳が土砂災害からの緊急避難場所として利用されていたようである。現在では神社が祀られ、地域住民の拠り所となっている。

埋蔵文化財センターでは、平成14年に国土地理院が発行した呉羽山周辺の活断層地図作成に協力し、また昨年9月には県の消防防災ヘリに搭乗して、空から見える災害の痕跡と遺跡の関係を調査した。過去の地震災害の実態を把握することによって将来の防災に役立てたいものである。

富山県消防防災ヘリコプター

富山市教育委員会 埋蔵文化財センター所報
富山市の遺跡物語 第6号

平成17(2005)年3月15日

編集・発行　富山市教育委員会 埋蔵文化財センター
〒930-0803　富山市下新木町5-12
TEL 076-442-4246　FAX 076-442-5810
URL http://homepage2nifty.com/kitadai/（北代調文広場と兼用）
E-mail maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp
印刷　大栄印刷株式会社